Research Monograph Series

二つの普遍性の生成論

印・型・形・座・席・位・無名性・文化生成を通じた個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の非対称的循環

The Generative Theory of Two Universalities:

The Asymmetrical Circulation between Singular-Concrete Universality and General-Abstract Universality through Mark, Kata, Form, Za, Seki, Position, Namelessness, and Cultural Generation

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Theory of Two Universalities:
The Asymmetrical Circulation between Singular-Concrete Universality and General-Abstract Universality through Mark, Kata, Form, Za, Seki, Position, Namelessness, and Cultural Generation

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、普遍性を既成の一般概念として前提するのではなく、文化が生成される過程から捉え直すことにある。そのため本論は、美学者母が生成学および生成の位相存在論において展開してきた「印・型・形・座・席・位・無名性・文化生成」という系列を、普遍性の生成過程として再構成する。

本論が区別する個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性は、相互に独立した二種類の普遍性ではない。それらは、同じ普遍性が異なる仕方で生成し、現れる二つの様態である。個別具体的普遍性とは、交換不可能な身体、場所、出来事および関係が、その差異を失うことなく自己以外へ開かれることによって成立する普遍性である。これに対して一般抽象的普遍性とは、複数の個別具体的関係から共通性、反復可能性、比較可能性および測定可能性を抽出することによって成立する普遍性である。

したがって、一般抽象的普遍性は個別具体的普遍性から独立して存在するのではない。個別的な接触が印として残され、型として反復され、形として共有され、座・席・位によって関係づけられ、無名性のうちに自己を越えて継承されることによって、文化的普遍性が成立する。科学的普遍性は、この文化的生成の内部から、測定、再現、検証および形式化に適した関係を抽出し、精密化した一般抽象的普遍性である。

科学的普遍性を成立させる観察、命名、記録、測定、技術伝承、再現、相互批判、教育、信頼および公開は、いずれも文化的実践である。再現可能性は型を必要とし、客観性は複数の席から行われる検証を必要とし、知識の公共性は座・位・無名性による継承を必要とする。この意味において文化は科学の対象であるだけでなく、科学が成立する生成的・歴史的・実践的基礎でもある。

しかし、近代以降に形成された科学主義は、科学的普遍性を無場所、無身体、無歴史の絶対的かつ完全な普遍性として理解する傾向をもつ。それは、科学的普遍性を成立させた個別具体的な文化生成を忘却し、一般抽象的普遍性を普遍性そのものと同一視する自己絶対化である。しかも、この科学的普遍性の絶対化それ自体が、近代に形成された一つの個別具体的な文化形態である。

本論は科学を否定し、文化的信念によって科学的妥当性を相対化しようとするものではない。科学的主張の妥当性を判定する規準と、科学的普遍性を成立させる生成的条件とは区別されなければならない。本論が問うのは後者である。哲学と形而上学は、科学に先行する未成熟な知識としてではなく、存在、対象、同一性、因果性、時間、空間、真理および認識可能性といった、科学が暗黙に前提する条件を問い直す文化の自己反省として位置づけられる。

さらに本論は、「道」と「公界（Kugai）」の関係を、普遍性の生成を理解するための局所的な位相モデルとして検討する。道は、それ自体を公界と単純に同一化するためではなく、こちらとあちらを分けながら、そのいずれにも排他的に所属せず、両者の接触、移動および変容を可能にする境界として考察される。道において現れる「どちらでもあり、どちらでもない」という重なりは、自己と自己以外、人間と人間以外、個別性と普遍性が分化する以前の契機を示している。

狭山池、行基の活動、高野山へ向かう道、山伏、女人高野および狭山美学校は、この位相的構造を歴史的・場所的に検討するための事例である。ただし、これらの事例を日本文化の固定的本質として扱うことはしない。本論が提示する「日本的な個別具体的普遍性」は、西洋的な一般抽象的普遍性に対抗する別の絶対性ではなく、近代科学主義によって忘却された普遍性の生成的多重性を開示するための思想資源である。

以上から本論は、普遍性の本質を、個別性を捨象した同一性ではなく、異なる個別性が同一化されることなく関係し、自己以外へ継承されうる多重な生成として定義する。個別具体的普遍性は一般抽象的普遍性を生成的に基礎づけるが、一般抽象的普遍性は個別具体的普遍性の全体を包含できない。科学的普遍性をその文化的・哲学的・形而上学的根へ戻すことは、科学を弱めることではなく、科学を自己絶対化から解放し、現実との生成的関係へと開き直すことである。

キーワード

生成学；生成の位相存在論；個別具体的普遍性；一般抽象的普遍性；文化的普遍性；科学的普遍性；印；型；形；座；席；位；無名性；公界；道；現実接地

目次

Contents

第0章 方法論的序論.....1
第1章 普遍性の生成的基礎.....8
第2章 二つの生成様態と非対称的循環.....15
第3章 印の存在論——個別具体的接触から普遍性へ.....23
第4章 型の存在論——差異を含む反復と文化的普遍性.....30
第5章 形の存在論——感受可能性・色気・作品性.....37
第6章 座・席・位の存在論——関係・位置・公共性の生成.....44
第7章 道と公界の位相論——分離・接続・移動の多重性.....52
第8章 無名性の存在論——自己を越える継承と文化生成.....61
第9章 科学的普遍性の文化的基礎——哲学・形而上学・近代科学.....69
第10章 現代の閉塞と普遍性の再編——創造・科学・文化の再接地...77
第11章 結論——多重な普遍性の生成へ.....85
参考文献.....94
方法論的声明.....99
用語注.....100

第0章　方法論的序論

0.1　問題の所在

現代社会において「普遍的である」という語は、しばしば「科学的である」こととほぼ同義に用いられている。測定可能であること、再現可能であること、形式化できること、誰が行っても同じ結果へ到達できることが、普遍性の主要な条件として理解されるからである。この意味における科学的普遍性は、近代科学の発展とともに自然現象の理解、技術の進歩、医療の改善および社会制度の合理化に大きく寄与してきた。

しかし、科学的普遍性の有効性を認めることと、それを唯一の完全な普遍性として絶対化することは同一ではない。科学的方法によって確証された命題が、特定の条件下で高い妥当性をもつことと、科学的に記述できないものには普遍的意味がないと判断することの間には、論理的な飛躍が存在する。この飛躍によって、科学は一つの厳密な認識方法であることを越え、存在、価値、経験および文化の全体を判定する最終的規準として位置づけられる。

本論では、この傾向を「科学的普遍性の自己絶対化」と呼ぶ。ただし、ここで批判の対象となるのは科学そのものではない。科学的普遍性を、その生成条件から切り離された無条件かつ完全な普遍性として扱う科学主義が問題なのである。

科学的普遍性は、文化から独立して突然成立したものではない。観察すること、対象を名づけること、経験を記録すること、道具を制作すること、手順を反復すること、結果を比較すること、異論を表明すること、知識を公開すること、技術を教育すること、先行者の記録を信頼しながら再検証することは、すべて歴史的に形成されてきた文化的実践である。

したがって科学は、文化の外部から文化を判定する超越的な審級ではない。科学もまた、文化の内部において生成され、継承され、制度化された認識実践である。科学的普遍性の妥当性は、この由来によって否定されるものではない。しかし、その普遍性がどのような身体、場所、技術、制度、言語、倫理および信頼によって支えられているのかを忘却するとき、科学的普遍性は自らを成立させた基礎を見失う。

本論の課題は、科学的普遍性を文化へ還元することではなく、科学的普遍性の成立を可能にした文化的生成を明らかにすることである。

0.2　文化を生成原理から考える

文化は、完成された作品、慣習、制度、宗教、言語および知識の集合としてのみ存在するのではない。それらがどのように生まれ、反復され、変形され、継承されてきたのかという生成過程そのものが文化である。

文化を完成した結果からのみ理解すると、すでに一般化された形式だけが見える。これに対して、文化を生成原理から考えるならば、一回的な出来事がどのように他者へ伝わり、別の場所と時代において反復され、元の出来事を越えた関係を形成するのかが問題となる。

本論は、この文化生成の過程を、次の系列によって考察する。

印・型・形・座・席・位・無名性・文化生成。

この系列は、固定された直線的発展段階ではない。それぞれの契機は相互に重なり、遡行し、反復し、再編成される。

「印」は、自己と自己以外との接触が現実に残した差異である。「型」は、その差異が別の身体、場所、時間において反復可能になる関係構造である。「形」は、型が感覚可能なまとまりとして一時的に現れたものである。「座」は、複数の存在が関係を形成する場であり、「席」は、その座において個別具体的な存在が占める交換不可能な位置である。「位」は、存在が関係の内部で成立させる差異的な位置と働きを意味する。

そして「無名性」は、名が存在しない状態ではない。それは、生成されたものが特定の作者や主体に閉じることなく、自己を越えて他者および後代へ継承される存在様態である。無名性によって、個別的な生成は私的所有を越え、文化生成へと移行する。

文化の原理を考えるとは、この系列を完成した制度の分類として整理することではない。一つの接触が、どのように印となり、型を生み、形を与え、座・席・位を組み替え、無名性のうちに継承されるのかを追跡することである。その過程を明らかにすることによって、普遍性がどのように個別具体的な現実から生成されるのかが見えてくる。

0.3　二つの普遍性から、普遍性の二つの生成様態へ

本論の題名にある「二つの普遍性」は、二つの相互排他的な実体を意味しない。個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性は、同じ普遍性が異なる方向へ展開するときに現れる二つの生成様態である。

個別具体的普遍性とは、ある存在がその固有性を失わないまま、自己以外へ開かれることによって生じる普遍性である。それは、個別的事例が一般概念の一例になることではない。一回的で交換不可能な出来事が、他者にとっても関係しうるものになることである。

一つの死、一つの苦痛、一つの制作、一つの場所の記憶は、そのまま他者の経験と交換できない。しかし、その交換不可能性が形、行為、言葉、物、儀礼または場所を通して他者へ開かれるとき、それは私的経験を越えた意味を獲得する。このとき普遍性は、個別性を捨象することによってではなく、個別性が他者との関係を生成することによって成立する。

一般抽象的普遍性とは、複数の個別的事例から差異を捨象し、共通する構造、規則または性質を抽出することによって成立する普遍性である。この普遍性は、比較、分類、計算、予測、制度化および科学的検証に不可欠である。一般抽象化それ自体は、否定されるべきものではない。それなしには、個別的経験を越えた知識の共有も、技術の安定した継承も困難になる。

問題は、一般抽象的普遍性が、自らを成立させた個別具体的普遍性を不要なものとして排除するときに生じる。抽象は個別から生成されるにもかかわらず、成立後には、自らが個別に先立つ完全な規準であるかのように作用する。この生成的基礎の転倒が、現代における普遍性の閉塞を形成している。

したがって両者の関係は、単なる並列でも対称的循環でもない。個別具体的普遍性は一般抽象的普遍性を生成的に基礎づけ、一般抽象的普遍性は制度、科学、技術および言語を通して個別具体的現実へ作用を返す。この関係を、本論では「非対称的循環」と呼ぶ。

0.4　普遍性の単一性と多重性

「同じ普遍性へたどり着く」という命題は、すべての差異が一つの同一性へ回収されることを意味しない。ここでいう同じ普遍性とは、異なる存在が互いの差異を保ったまま関係しうるという根本的な開かれを指す。

普遍性は、差異を消去した後に残る最小公分母ではない。異なる個別性が、一方を他方へ還元することなく、関係を形成しうるという出来事そのものである。そのため普遍性は一つでありながら、常に多重である。

この多重性は、単なる多様性ではない。多様性という語が、すでに成立した複数の存在が並列している状態を指すことがあるのに対して、多重性とは、関係によって存在そのものが分化し、生成され続ける構造を意味する。自己と自己以外、人間と人間以外、こ

ちらとあちら、個別と普遍は、あらかじめ完成した項として存在し、その後に関係するのではない。両者を分けながら関係させる契機を通して、それぞれが成立する。

この意味において、普遍性は完成した全体ではなく、異なる個別性の間に接続可能性を開き続ける非閉鎖的構造である。これは、存在を固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用から生成される位相的関係として捉える生成の位相存在論と一致する。

0.5　科学、科学主義、文化

本論は、科学と科学主義を明確に区別する。

科学とは、観察、仮説、測定、実験、反証、再現および批判を通して、対象間の関係を検証可能な形で明らかにする実践である。科学的普遍性は、観察者の恣意性を抑制し、異なる観察者の間で知識を共有するための強力な形式である。

これに対して科学主義とは、科学的方法によって取り扱いうるものだけが実在し、科学的に形式化できる命題だけが正当な知識であるとみなす文化的態度である。科学主義は、科学的普遍性の有効範囲を存在全体へ拡張し、科学的記述を真理の唯一の形式として扱う。

科学は一般抽象的普遍性を精密化するが、それは個別具体的現実の全体を包含しない。固有の死、場所の記憶、一回的な出会い、作品との接触、身体的苦痛、歴史的責任、色気などは、それらに関する一般的説明が可能であっても、その個別具体的な現実を説明へ完全に置換することはできない。

「色気」とは、本論の用語では、未特定の未来が形の内部に感受される関係力である。色気は測定不能だから非現実なのではない。形がまだ決定されていない未来へ開かれていることを、個別具体的な接触のうちに感受させる。一般抽象的な説明は色気の条件を分析できるが、その一回的な現れを代替することはできない。

したがって科学の限界を示すことは、科学を否定することではない。それは、科学的普遍性が何を可能にし、何を原理的に取り残すのかを明確にすることである。科学を自己絶対化から解放することによってこそ、科学は個別具体的現実との関係を回復できる。

0.6　文化・哲学・形而上学・科学の生成的関係

文化、哲学、形而上学、科学は、単純な歴史的発展段階として配列されるものではない。しかし、それらの間には生成的な基礎づけの関係がある。

最初にあるのは、個別具体的な存在と世界との接触である。その接触が印として残り、反復され、継承されることによって文化が形成される。哲学は、その文化的関係の内部

で、存在、知識、価値、真理および自己について反省する。形而上学は、存在が存在として理解されるための条件、対象の同一性、因果性、時間、空間および世界の秩序を問う。科学は、これらの文化的・哲学的・形而上学的条件の内部から、測定可能で再現可能な関係を限定し、検証可能な知識として精密化する。

この関係は単純な一方向ではない。科学によって形成された知識と技術は文化を変容させ、哲学と形而上学の問いを更新し、個別具体的な生活の条件を組み替える。しかし、科学が文化へ作用を返すことは、科学が文化的基礎から独立したことを意味しない。

科学が形而上学を否定するときでさえ、科学は対象の同一性、自然法則の持続、数学の適用可能性、観察可能性、因果的秩序および真理を探究する価値を暗黙に前提している。形而上学の否認は、形而上学からの完全な離脱ではなく、暗黙の形而上学を無自覚に採用する可能性をもつ。

文化は科学以前の未成熟な状態ではない。文化は、科学を含むあらゆる知識実践が生成され、反復され、批判され、継承される基盤である。同様に、哲学と形而上学も科学によって不要になった過去の思考ではなく、科学が自らの前提と限界を理解するために必要な反省的実践である。

0.7　日本的普遍性という問題設定

本論が「日本的な個別具体的普遍性」と呼ぶものは、日本人に固有の不変的本質を意味しない。また、西洋を一般抽象的、日本を個別具体的として固定的に二分するものでもない。

西洋思想の内部にも、個別具体性を重視する哲学、芸術、宗教および生活実践が存在する。日本文化の内部にも、抽象化、制度化、排除および普遍的規範の強制が存在する。したがって、ここで扱う差異は文明の本質的対立ではなく、普遍性が形成されてきた歴史的傾向と、その表現形式の差異である。

本論が日本文化から取り出そうとするのは、型、座、席、位、間、道、公界、無名性などに現れる、個別性を消去せずに関係を形成する論理である。これらは西洋的普遍性に代わる新たな絶対性ではない。一般抽象的普遍性だけを普遍性とみなす現代的理解をほぐし、普遍性が本来有していた複数の生成経路を回復するための思想資源である。

ゆえに日本的な個別具体的普遍性は、文化的優越性の主張ではない。それは、どの文化にも存在しうる個別具体的生成を、日本の歴史、場所、言語および実践から明示する試みである。

0.8　道と公界の方法論的位置

道と公界（Kugai）の関係は、本論全体の結論ではなく、個別具体的普遍性の生成を考えるための重要な位相モデルである。

道は、こちらとあちらの間を通る。道が生まれることによって移動が可能になるだけでなく、道を挟んで「こちら」と「あちら」が分化する。したがって道は、すでに存在する二つの領域を後から接続するだけではない。道そのものが、二つの領域を分けながら成立させる生成的境界である。

道は、こちらだけにも、あちらだけにも排他的に所属しない。道には、両者を分ける働きと、両者を接続する働きが重なっている。この「どちらでもあり、どちらでもない」という重なりに、公界的性格が現れる。

ただし、歴史学上の公界と、道の存在論的構造を無条件に同一視することはできない。網野善彦が論じた無縁・公界・楽は、具体的な歴史制度、権力関係、移動、自治および排除の問題を含む。本論ではこの歴史的公界を尊重しながら、道が特定の所属を横断し、異なる個別性を関係づける働きを「公界的構造」として考察する。

「道そのものが公界である」という美学者母の把握は、この存在論的水準に位置する。それは歴史学的定義を置き換える命題ではなく、道が分離と接続を同時に生成することを示す位相的命題である。

0.9　本論の方法

本論は、生成論的方法、位相論的方法、系譜学的方法および場所論的方法を組み合わせる。

生成論的方法は、完成された概念や制度を所与とせず、それらがどのような接触、反復、差異化および継承から成立したのかを問う。

位相論的方法は、存在を固定的属性からではなく、接続、境界、内外、重なり、移動および位置関係から捉える。

系譜学的方法は、科学的普遍性を無歴史的な真理形式として扱わず、その成立を支えた文化、哲学、形而上学、技術および制度を検討する。

場所論的方法は、狭山池、行基、高野山への道、山岳宗教、女人高野および狭山美学校を、抽象理論の単なる例証としてではなく、理論そのものが生成される個別具体的な場所として扱う。

これらの方法を通して本論は、普遍性を上方から個別へ適用される規則としてではなく、個別具体的現実から生まれ、他者と後代へ継承され、やがて一般抽象的形式へ変換される生成として明らかにする。

0.10　本論の射程

本論の目的は、一般抽象的普遍性を個別具体的普遍性へ解消することではない。また、科学的知識を文化的信念の一つに還元することでもない。文化的に生成されたという事実と、科学的命題が証拠によって妥当化されることは、異なる水準に属する。

文化は科学的妥当性を直接決定しない。しかし文化は、何を対象として観察するのか、どのような方法を正当とするのか、誰が検証へ参加できるのか、知識をどのように記録し公開するのか、誤りをどのように訂正するのかという、科学の成立条件を支えている。

本論が回復しようとするのは、科学に対する文化の優位ではない。科学的普遍性が自らの文化的基礎を認識し、個別具体的普遍性との関係を回復するための生成的循環である。

この循環によって、普遍性は絶対性や完全性から解放される。しかし、それは普遍性が弱くなることを意味しない。むしろ普遍性は、閉じた完成態ではなく、異なる個別性を関係させ続ける非閉鎖的な力として、より根源的に理解されるのである。

第1章　普遍性の生成的基礎

1.1　普遍性はどこから生まれるのか

従来、普遍性は、複数の個別的事例に共通して認められる性質、あるいは個別的差異を越えて妥当する法則として理解されてきた。この理解においては、個別性と普遍性はあらかじめ分離されている。個別的存在が先にあり、それらを比較することによって共通性が抽出され、普遍概念が形成されると考えられる。

しかし、この説明は、複数の個別的存在がなぜ比較可能なのか、また、一つの個別的経験がなぜ自己を越えて他者へ伝わりうるのかを十分に説明しない。共通性を抽出する以前に、異なる存在が関係しうる条件がなければならない。

本論では、普遍性を、個別性の外部に存在する上位概念としてではなく、異なる個別性が関係を形成することによって生じるものとして捉える。普遍性は個別性を越えた場所に最初から存在するのではない。それは、個別的存在が自己の閉鎖性を越え、自己以外との接続を生み出す出来事から生成される。

したがって、普遍性についての根源的な問いは、「何がすべての個別に共通するのか」ではない。それ以前に、「異なる個別性は、なぜ関係しうるのか」と問わなければならない。

1.2　関係先行性

生成の位相存在論において、存在は、あらかじめ完成した実体として関係に入るのではない。存在は、自己・他者・環境の相互作用を通して、そのつど生成される位相的構造である。

この立場を、本論では「関係先行性」と呼ぶ。

関係先行性は、関係という第三の実体が個々の存在に先立つという意味ではない。それは、自己と自己以外が完全に成立してから関係するのではなく、接触、差異化、応答および切断を通して、自己と自己以外が同時に成立することを意味する。

自己は、自己だけでは自己になれない。自己は、自己以外に触れ、自己以外との差異を経験することによって自己として現れる。同様に、自己以外も、自己から完全に独立した無関係な外部ではない。それは自己との接触を通して、自己にとっての外部として分節される。

ここで生じる関係は、二項を後から結びつける線ではない。それは二項そのものを生成する契機である。この契機は、自己にも自己以外にも完全には還元できない。

同じことは、人間と人間以外、こちらとあちら、内と外、個別と普遍にも当てはまる。両者を分けるものは、単なる空白ではない。分けると同時に関係させ、それぞれをそれぞれとして成立させる生成的境界である。

1.3　自己以前性と人間以前性

自己以前性とは、自己が成立する以前に、自己を可能にする関係がすでに働いていることを示す概念である。それは時間的に過去の自己を指すのではなく、自己の成立に論理的・存在論的に先行する条件を意味する。

自己が「私」として自己を認識するためには、身体、言語、記憶、他者、環境、慣習および物質との関係がすでに存在していなければならない。しかし、それらの関係は、完成した自己が自由に選択したものではない。自己は、自らが成立する以前から作用している関係の内部に生まれる。

人間以前性もまた、単に人類誕生以前の自然を意味しない。それは、人間による意味づけ、分類および制度化に先立って、世界が人間を越えて生成していることを示す。水は人間によって「水」と名づけられる以前から流れ、地形を変え、生命を支えていた。動物は人間による道の設計以前から移動を反復し、獣道を形成していた。

人間以前性は、人間が世界の唯一の生成主体ではないことを明らかにする。人間は、すでに生成している世界へ参加し、その痕跡を読み、形を変え、新たな関係を付け加える存在である。

したがって、自己以前性と人間以前性は、主体を消去する概念ではない。むしろ主体を、自己完結した起源から、先行する関係を継承し変形する存在へと捉え直す概念である。

1.4　分化以前の契機

自己と自己以外を分けるためには、その区別に先立つ契機が必要である。人間と人間以外、こちらとあちらを分ける場合にも同様である。

この契機は、両者の外部にある第三の固定的実体ではない。また、両者が未分化に融合した同一状態でもない。それは、区別が生じうる重なりであり、分離と接続がまだ一方へ確定していない生成状態である。

それは、どちらでもあり、どちらでもない。

「どちらでもある」とは、契機が分化する両側に関与していることを意味する。「どち

らでもない」とは、それがどちらか一方に排他的に所属しないことを意味する。この二重性によって、契機は対立項の外から両者を統合するのではなく、両者の間において分化そのものを生じさせる。

美学者母の理論における「非」は、この生成的な分化に関係する。「非」は、単なる否定や欠如ではない。「Aではない」と排除するだけでなく、AがAとして成立するために、その境界を開く働きである。

非自己は、自己を破壊する外部ではない。それは自己を自己として分化させながら、自己を自己以外へ開く契機である。非人間も、人間性の単純な否定ではない。それは、人間が人間であることの境界を示し、その境界が自然、動物、物質、技術および未知の存在へ開かれていることを明らかにする。

1.5　「非」と「即」

「非」が分化の契機であるのに対して、「即」は、分化したものが互いの差異を失うことなく直接的な関係を成立させる契機である。

即は、二つのものが同一であることを意味しない。たとえば「生活即芸術」は、生活と芸術の区別を消去し、すべての生活を無条件に芸術と呼ぶ命題ではない。生活と芸術が異なるものでありながら、その差異のただなかで互いを生成する関係に入ることを意味する。

非と即は対立しない。非によって差異が開かれ、即によって差異が接続される。非なき即は、差異を失った融合となる。即なき非は、関係を失った分断となる。生成とは、非と即が同時に働き、分離と接続が互いを生成する出来事である。

この構造は、個別具体的普遍性の基礎をなす。個別的存在は、非によって他の存在から区別される。しかし即によって、その差異を保持したまま他者へ開かれる。この開かれが普遍性を生む。

したがって普遍性は、差異の否定ではない。非によって生じた差異が、即によって関係を形成することである。

1.6　インターフェイスとしての境界

インターフェイスは、すでに存在する二つの領域を中立的に媒介する装置ではない。それは、二つの領域を分けながら接続し、それぞれの存在様態を変化させる生成的境界である。

画面、入口、窓、道、言語、作品、身体、制度は、いずれもインターフェイスになりうる。しかし、物理的または技術的な媒介面であるだけでは、生成学的な意味でのインターフェイスとは限らない。インターフェイスは、接触する双方に変化を生じさせ、新たな関係を生成するときに成立する。

インターフェイスを通過する以前と以後では、自己も自己以外も同一ではない。接触は、それぞれに印を残す。その印が反復可能な関係を形成するとき、型が生まれる。このため、インターフェイスは文化生成の入口である。

美学者母が民宿狭山美学校をインターフェイスとして捉えるのは、それが単なる宿泊施設、学校、居住空間または作品展示空間のいずれかに限定されないからである。宿泊者、生活者、制作者、研究者、地域住民および場所の歴史が接触することによって、それぞれの位置と意味が変化する。狭山美学校は、完成した一つの制度ではなく、複数の関係がそのつど生成される現実のインターフェイスである。

1.7　自己外部化とその限界

自己外部化とは、自己が行為、言葉、作品、制度、技術および記録を通して、自己の内部にあるものを自己以外の世界へ移す働きである。文化は、自己外部化なしには成立しない。自己の経験が痕跡として外部に残されることによって、他者と後代はそれに接触できる。

しかし自己外部化は、自己の内部をそのまま外部へ複製することではない。外部化されたものは、自己の意図から離れ、他者の解釈、物質の変化、制度的配置、時間の経過および偶然の出来事によって変容する。

ここに自己外部化の限界がある。自己は、自らが外部化したものの意味と将来を完全には統御できない。しかし、この限界は失敗ではない。自己外部化されたものが自己の所有と意図を越えるからこそ、他者による継承と文化生成が可能になる。

自己外部化の限界は、無名性への入口である。作品や行為は、作者の名を保持する場合であっても、作者だけに帰属する閉じた意味を失う。それは他者の席へ渡り、別の型として反復され、新たな形を生む。

したがって自己外部化は、自己の拡張であると同時に、自己による支配の限界を露呈させる。文化生成は、この自己を越える契機から始まる。

1.8　人間以後性と自己以後性

自己以前性と人間以前性が、自己と人間の成立に先行する関係を示すのに対して、自己以後性と人間以後性は、自己と人間の作用がその主体を越えて持続することを示す。

自己以後性とは、自己が残した印、型、形、言葉、作品および関係が、自己の不在や死の後にも作用し続けることである。そこでは自己は、同一性を保ったまま永続するのではない。自己の痕跡は他者によって受け取られ、変形され、異なる関係の一部となる。

人間以後性とは、人間が生成した制度、都市、技術、環境改変および人工物が、個々の人間や人類の意図を越えて作用し続ける可能性を意味する。それは単純な「人類滅亡後」の時間ではない。人間が自らの行為の結果を完全には回収できず、人間以外の存在と将来へ委ねざるをえない構造である。

自己以前性から自己以後性へ、人間以前性から人間以後性へと至る関係は、直線的な時間系列ではない。過去の痕跡は現在の行為によって読み替えられ、将来の可能性は現在の形の内部へ畳み込まれる。文化生成とは、この非線形な継承が行われる時間的インターフェイスである。

1.9　自己の継承と自己以外の継承

文化生成には、少なくとも二つの継承がある。一つは自己の継承であり、もう一つは自己以外の継承である。

自己の継承とは、自己の名前、記憶、思想、作品、技術および行為が後代へ伝えられることである。ここでは、誰が行ったのかという出自と責任が保持される。

自己以外の継承とは、継承者が自分自身の所有物ではない言語、型、場所、自然環境、技術、制度および他者の痕跡を受け取り、それを次へ渡すことである。人間は、自分が始めたのではないものを継承し、自分が終わりを決められないものを後代へ委ねる。

文化が成立するためには、この二つが重ならなければならない。自己の継承だけが強調されれば、文化は作者、家系、所有権および自己同一性の保存へ閉じる。自己以外の継承だけが強調されれば、誰が何を行い、どのような責任を負ったのかが失われる。

無名性は、自己の消去ではなく、自己の継承と自己以外の継承を重ねる構造である。名と責任を保持しながら、生成されたものを自己の独占から解放する。この重なりによって、個別的な制作は文化的な継承へ移行する。

1.10　現実接地

普遍性が個別具体的現実から生成されるためには、現実との接触が必要である。本論では、この接触を「現実接地」と呼ぶ。

現実接地とは、抽象概念、記号、言語、評価または制度が、身体、物質、場所、行為および結果との関係を保持することである。現実接地を失った一般抽象的普遍性は、自らの内部で記号を反復し、その妥当性を自己参照的に強化する。

評価が評価を呼び、証明がさらなる証明を要求し、価値が既存の価値を根拠として増幅するとき、一般抽象的普遍性はレバレッジ構造を形成する。そこでは、記号上の整合性が現実との接触に代わり、制度内で認められることが真理または価値そのものとみなされる。

科学的普遍性も、現実接地を自動的に保証されているわけではない。測定値、統計、モデルおよび計算は強力な認識手段であるが、それらが何を測定し、何を捨象し、誰の現実へどのような結果をもたらすのかを問い続けなければならない。

個別具体的普遍性は、一般抽象的普遍性を現実へ接地し直す。それは抽象を廃棄するのではなく、抽象がどのような個別的接触から生まれ、どの現実へ作用を返しているのかを明らかにする。

1.11　個別具体的普遍性の原型

個別具体的普遍性の最小構造は、一つの存在が自己以外と接触し、その接触によって双方が変化し、その変化が第三の存在へ継承可能になることである。

この生成は、単なる二項関係ではない。自己と自己以外の接触から、両者のいずれにも還元できない新たな関係が生じる。生成の位相存在論における三項生成は、この構造を示している。

第一の項と第二の項が接触するとき、第三の項は両者の合計として現れるのではない。それは非対称的で、不可逆的で、再帰的な生成である。一度生じた第三項は、元の二項の関係を変化させ、次の生成の条件となる。

一つの足跡は、身体と地面の接触から生まれる。しかし足跡が他の存在によって読まれ、辿られるとき、それは単なる物理的痕跡ではなく、移動を方向づける印となる。反復された印は獣道または人間の道を形成し、その道は後続する身体の移動をさらに方向づける。

ここには、個別具体的接触から、自己を越えた関係が生まれる原型がある。普遍性は最初から道の上に置かれた規則ではない。複数の個別的な通過が互いに重なり、後続する存在に接続可能性を開くことによって生成されるのである。

1.12　普遍性と構造的非閉鎖性

個別具体的普遍性は、すべてを一つの完成した全体へ包摂する普遍性ではない。それは、まだ現れていない他者、未来の使用、未知の解釈および人間以外の存在に対して開かれている。

この開かれを、構造的非閉鎖性と呼ぶ。

構造的非閉鎖性は、境界が存在しないことではない。むしろ境界があるからこそ、内と外の接触が可能になる。完全に閉じたものには外部との生成がなく、完全に境界を失ったものには差異をもった関係が成立しない。

境界は、閉鎖と開放のいずれか一方ではない。それは分けながら通し、守りながら変化させる。この境界の多重性が、普遍性を完成した同一性から生成し続ける接続可能性へと転換する。

普遍性は、すべてを説明し終える完全性ではない。異なる存在が、差異を失わずに関係しうる開かれである。その意味で普遍性の本質は、完成ではなく生成にある。

第2章　二つの生成様態と非対称的循環

2.1　二つの普遍性という表現

本論が「二つの普遍性」と呼ぶものは、二つの異なる世界に属する普遍性ではない。また、どちらか一方だけを選択しなければならない対立的な原理でもない。個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性は、同じ普遍性が異なる操作と方向を通して現れる二つの生成様態である。

個別具体的普遍性は、個別的存在がその固有性を保ちながら、自己以外との関係を生成する方向に成立する。一般抽象的普遍性は、複数の個別的関係から共通する構造を取り出し、異なる場所や主体にも適用可能な形式へ変換する方向に成立する。

両者は、具体と抽象、特殊と一般という静的な分類だけでは捉えられない。個別具体的普遍性にも反復と共有があり、一般抽象的普遍性も個別具体的な観察、実験、記録および判断なしには成立しない。重要なのは、それぞれがどの方向へ生成しているかである。

個別具体的普遍性は、差異を保持しながら関係を開く。一般抽象的普遍性は、差異の一部を捨象しながら共通形式を確立する。この二つの働きによって、人間は一回的な現実を継承すると同時に、その現実を越えて知識と制度を共有できる。

2.2　個別具体的普遍性

個別具体的普遍性は、個別的事例に普遍概念を適用した結果ではない。それは、一回的で交換不可能な存在または出来事が、その固有性そのものによって自己以外へ開かれるときに成立する。

たとえば、ある人間の苦痛は、その人間にしか経験できない。第三者は、その苦痛を同一のものとして経験できない。しかし、その苦痛が声、表情、身体、言葉、作品または行為として現れるとき、他者は自分自身の経験とは異なるものとして、それに応答できる。

ここで共有されるのは、苦痛の同一内容ではない。完全には共有できない苦痛に対して、それでも関係し、応答しなければならないという開かれである。その開かれが、個別具体的普遍性を形成する。

個別具体的普遍性においては、固有名、身体、場所、時間および歴史が消去されない。むしろ、それらが交換不可能であることが、他者との関係を要求する。したがって個別

具体的普遍性は、個別性を普遍性の障害として扱わない。個別性こそが、普遍性の生成する場所である。

芸術作品もこの構造を示す。一つの作品は、特定の作者、素材、場所、時代および制作行為から生まれる。しかし作品が作品性を獲得するとき、それは作者の意図や所有へ閉じることなく、未知の他者に対して接続可能になる。作品の普遍性は、固有性を捨象した一般概念にあるのではない。その作品にしかない形が、別の存在の経験を開くことにある。

2.3　一般抽象的普遍性

一般抽象的普遍性は、複数の個別的事例に共通する関係、性質、規則または構造を抽出し、それを個々の事例から相対的に独立させることによって成立する。

この抽象化によって、知識は特定の身体や場所を越えて共有可能になる。単位、分類、数式、法則、規格、概念、制度および手続きは、個別的差異の一部を捨象することで、複数の主体による共通使用を可能にする。

一般抽象的普遍性は、文化に対立するものではない。言語、暦、貨幣、法、宗教制度、教育、建築規則および儀礼も、一般化と抽象化を含んでいる。科学は一般抽象的普遍性の唯一の担い手ではなく、その高度に方法化され、検証可能性を強化した形式である。

したがって、文化的普遍性を個別具体的普遍性と完全に同一視し、科学的普遍性を一般抽象的普遍性とだけ同一視することはできない。文化は個別具体的普遍性を基礎としながら、その内部に一般化、形式化および制度化を生み出す。科学的普遍性は、その文化的抽象化の系譜から成立した、特殊かつ精密な実践である。

問題は一般抽象化そのものではなく、抽象された形式が、その生成条件を忘却し、個別具体的現実よりも先に存在する絶対的規準として作用することである。

2.4　文化的普遍性

文化的普遍性とは、ある文化の価値をすべての文化へ強制することではない。また、特定の民族、国家または共同体の慣習を人類一般の本質とみなすことでもない。

本論における文化的普遍性とは、一回的な経験、制作、出来事および場所が、印・型・形・座・席・位・無名性を通して、自己と同時代を越えて継承される生成的構造を指す。文化的普遍性の基礎にあるのは、内容の完全な同一性ではない。受け取る者は、先行する経験をそのまま再現できない。型を反復しても、身体、素材、環境および時代が異なるため、同一の形は生まれない。にもかかわらず、差異を含んだ反復によって関係は継承される。

文化的普遍性は、同じものをどこでも再生産する普遍性ではない。それは、異なる存在が異なる仕方で受け取り直すことを可能にする普遍性である。

このため文化的普遍性は、多重性を保持する。一つの型は複数の形として現れ、一つの形は異なる席から経験され、一つの座は複数の位を成立させる。文化は、この差異を含む継承によって持続する。

文化的普遍性は、個別具体的普遍性を主要な基礎とする。しかし文化には、言語、規範、制度および分類といった一般抽象的形式も含まれる。したがって文化的普遍性とは、個別具体性だけに閉じたものではなく、個別具体的生成から一般抽象化が生じ、再び個別的実践へ戻る循環の全体である。

2.5　科学的普遍性

科学的普遍性は、観察者、場所、文化的背景などの差異を可能な限り制御し、同じ条件の下では同じ結果が得られる関係を確立しようとする。

この普遍性は、対象を測定可能な変数へ変換し、条件を限定し、手続きを明示し、結果を公開し、第三者による検証と反証へ開くことによって成立する。その力は、個別的な印象や権威から知識を相対的に切り離せる点にある。

しかし、科学的普遍性も個別具体的現実から始まる。観察は常に、ある身体、装置、場所および時間において行われる。実験結果は、具体的な出来事として生じる。データは、世界そのものではなく、特定の方法と装置によって現実との接触から残された印である。

この印が記録され、手順が型として明示され、結果が図式や数式の形を与えられ、研究共同体という座において、個々の研究者の席から検証される。その知識が発見者個人の所有を越え、出典と責任を保持しながら公共的に継承されるとき、科学的無名性が成立する。

この意味において、科学的普遍性は文化生成の系列から独立していない。

科学における観察は印に、実験手続きは型に、理論とモデルは形に、研究共同体は座に、個別の研究者と観察者は席に、資格・責任・権限・理論的位置は位に、知識の公共的継承は無名性に対応する。

この対応は、科学を文化へ単純還元するための比喩ではない。科学的普遍性が成立するためにも、個別的接触、反復可能な実践、社会的配置および世代を越えた継承が必要であることを示している。

2.6　科学的妥当性と生成的基礎

科学が文化的実践から生成されたという命題は、科学的知識が文化的信念にすぎないという命題を意味しない。

ここでは、科学的妥当性と科学の生成的基礎を区別する必要がある。

科学的妥当性とは、証拠、論理的一貫性、再現可能性、説明力、予測力および反証可能性などを通して、科学的主張がどの程度支持されるかという問題である。

生成的基礎とは、そのような検証を可能にする言語、技術、制度、教育、信頼、倫理、公開性および共同体が、どのように形成され継承されてきたかという問題である。

科学的主張は、特定の文化において好まれているという理由だけで正しくなるのではない。しかし、何を証拠として扱うのか、どのように測定するのか、誰が検証できるのか、誤りをどのように訂正するのかという実践は、歴史的に形成された文化的基盤を必要とする。

この二つの水準を混同すれば、二つの誤りが生じる。一方では、科学が文化的に生成されたことを理由に、その妥当性をすべて相対化する文化相対主義が生じる。他方では、科学的妥当性を根拠として、科学を成立させた文化的・歴史的条件まで無意味とみなす科学主義が生じる。

本論はそのいずれも採用しない。科学的妥当性を尊重しながら、その成立を支える個別具体的な生成条件を明らかにする。

2.7　再現可能性と型

科学的普遍性の中核とされる再現可能性は、型の存在なしには成立しない。

実験を再現するためには、使用する装置、材料、単位、操作手順、環境条件、記録方法および評価基準が、他者によって反復可能な形で継承されなければならない。これは、単に命令文を読むことではない。実験者は、身体的な技術、装置の扱い方、異常の見分け方、誤差の判断および結果の読み方を学ばなければならない。

このような暗黙的・身体的知識も含めて、科学的実践には型が存在する。

ただし型は、同一結果を機械的に複製する固定形式ではない。異なる実験者、装置、場所および時代において、何を同一条件とみなすかを調整しながら反復を可能にする関係構造である。再現の失敗もまた、型の条件を明らかにし、型を修正する契機となる。

「無名性に気づかなければ、型には気づかない」という命題は、科学にも当てはまる。科学的手順の多くは、個々の発見者の名前を越えて日常的に使用されている。誰が最初に行ったかを知らなくても実践できるほどに継承されたとき、手順は型として文化に定着する。

しかし無名性は、出典や功績を消去することではない。型が個人を越えて使用可能になることと、誰が何を発見し、どのような責任を負うかを記録することは両立しなければならない。

2.8　客観性と席

客観性は、誰の視点も含まない「無視点」の認識として理解されることがある。しかし、現実の科学的客観性は、視点を完全に消去することによって成立するのではない。異なる席にある複数の観察者が、方法、証拠および推論を相互に検証できることによって成立する。

観察者は身体、装置、訓練、専門分野および制度的位置をもつ。完全に無位置の観察者は存在しない。必要なのは、位置を隠すことではなく、その条件を明示し、他の席から検証可能にすることである。

したがって客観性は、主観の単純な排除ではない。それは、複数の個別的な席が相互批判へ開かれる座の構造である。

座が閉鎖され、特定の資格、権力、資金または制度だけが発言可能性を独占するとき、科学的客観性も弱まる。逆に、すべての意見を無条件に同等とすれば、専門的訓練と証拠による判断が失われる。

客観性に必要なのは、席の差異を消去することでも、すべての席を同一化することでもない。それぞれの席が負う条件、能力および責任を明らかにしながら、相互検証可能な関係を維持することである。

2.9　科学的公共性と無名性

科学的知識は、特定の研究者によって発見されたとしても、その研究者だけが使用できる私的所有物としては成立しない。方法と結果が公開され、他者によって検証され、修正され、別の研究へ継承されることによって、科学的知識となる。

ここに科学的公共性と無名性の関係がある。

無名性は、研究者の名を消すことではない。剽窃、功績の奪取、責任主体の隠蔽は、生

成的無名性ではない。生成的無名性とは、出典と責任を保持しながら、知識が発見者個人の意図と生涯を越えて継承されることである。

科学における著者名、引用、研究履歴、利益相反の開示などは、知識を個人へ閉じるためではなく、公共的継承に責任を与えるために必要である。名は責任を保持し、無名性は知識を自己所有から解放する。

この両立が失われると、二つの危険が生じる。名だけが強調されれば、科学は権威、業績、評価指標および所有権の競争へ閉じる。無名だけが強調されれば、発見の出自、誤りの責任および権力関係が不可視化される。

科学的公共性は、名と無名性の緊張を保持する文化的制度なのである。

2.10　一般抽象的普遍性の自己絶対化

一般抽象的普遍性は、個別具体的な起源から離れることによって、高い移動可能性と適用可能性を獲得する。数式、規格、法律、統計、価格およびアルゴリズムは、異なる場所と主体の間で共通形式として作用できる。

しかし、その移動可能性は、一般抽象的普遍性が現実から完全に独立していることを意味しない。抽象形式は、特定の個別的現実から何かを選び、何かを捨象することによって成立している。

自己絶対化は、この選択と捨象が忘却されるときに起こる。抽象形式が、現実を理解する一つの方法ではなく、現実そのものとして扱われるのである。

統計的な平均が一人ひとりの現実よりも真実であるとみなされ、経済指標が生活の質そのものに置き換わり、評価指標が研究や作品の価値そのものとみなされ、アルゴリズムによる分類が人間の存在を完全に表すと理解されるとき、一般抽象的普遍性は個別具体的現実を従属させる。

この転倒において、抽象は自らを生み出した個別性を評価し、選別し、排除する規準になる。結果として、抽象形式に適合しない現実は、存在していても存在しないものとして扱われる。

2.11　近代科学主義という文化形態

科学的普遍性の絶対化は、科学そのものの必然的帰結ではない。それは、科学的方法、近代国家、産業化、資本主義、植民地主義、官僚制、標準化および技術的管理が結びつくなかで形成された歴史的な文化形態である。

したがって「科学的であることが絶対的・完全である」という理解は、人類史を通じて自明であったわけではない。それは比較的新しく形成された普遍性の解釈である。

この文化形態の特徴は、自らが文化であることを否認する点にある。科学的普遍性を絶対化する文化は、自らを特定の歴史と場所から生まれた文化としてではなく、文化的差異を超越した中立的な世界そのものとして提示する。

ここには自己言及的な矛盾がある。科学的普遍性を絶対化する態度は文化的に形成されたものであるにもかかわらず、文化的に形成されたという自らの条件を否定する。個別具体的普遍性を基礎として成立した文化が、その基礎を忘却し、一般抽象的普遍性だけを普遍性として承認するのである。

本論の批判は、近代科学の成果を否定するものではない。それは、科学的普遍性と、その文化的自己絶対化を分離するための批判である。

2.12　非対称的循環

個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の関係は、循環している。しかし、その循環は対称ではない。

個別具体的普遍性は、身体、場所、物質、出来事および他者との接触から生まれる。この接触が反復され、共有され、形式化されることによって、一般抽象的普遍性が成立する。この意味で、個別具体的普遍性は一般抽象的普遍性に生成的に先行する。

一般抽象的普遍性は、成立した後、個別具体的現実へ作用を返す。科学理論は技術を生み、技術は身体と環境を変える。法律は行為を規定し、統計は政策を方向づけ、規格は制作と流通を組み替える。この反作用によって、新たな個別具体的現実が生成される。

しかし、一般抽象的普遍性は、自らが作用する個別具体的現実のすべてを予測し、包含することはできない。抽象形式の適用は、常に予期しない結果、例外、抵抗、誤差および新しい個別性を生む。

したがって循環は閉じない。個別具体的現実から一般抽象的形式が生まれ、その形式が現実へ作用を返すたびに、新たな差異が生まれる。この差異が再び印となり、型、形、座、席、位および無名性を組み替える。

非対称的循環とは、起源へ同一のものが戻る円環ではない。それは、反復のたびに差異を生みながら進む生成的循環である。

2.13　忘却から再接地へ

現代の問題は、一般抽象的普遍性が存在することではない。それが自らの個別具体的な生成基礎を忘却し、唯一の普遍性として振る舞うことである。

この忘却を解くためには、科学的普遍性を否定するのではなく、その生成過程を遡らなければならない。データを印へ、手続きを型へ、理論を形へ、研究共同体を座へ、研究者を席へ、権限と責任を位へ、知識の公共性を無名性へと遡行して考える必要がある。

この遡行は、科学を原始的な文化へ戻すことではない。科学が現在も文化的生成によって支えられていることを認識することである。

科学的普遍性が個別具体的普遍性へ再接地されるとき、科学は絶対性を失うのではない。むしろ、自らの有効範囲、前提、責任および限界を明示できる、より厳密な知識実践となる。

普遍性を完成した答えとしてではなく、異なる個別性の間に関係を開き続ける生成として捉えること。それが、二つの生成様態を再び結び直すための出発点である。

第3章　印の存在論――個別具体的接触から普遍性へ

3.1　印とは何か

印は、文化生成の最小単位である。しかし、それは完成した記号でも、対象を代理する表象でもない。印とは、ある存在と別の存在との接触によって、現実に差異が残された状態である。

足が地面に触れることで足跡が生まれ、刃物が木に触れることで切り跡が残り、水が土地を流れることで地形が変わる。声は空気と身体を振動させ、文字は筆記具と支持体との接触として残される。これらの印は、接触したいずれか一方だけに由来するものではない。

足跡は足だけの産物でも地面だけの産物でもない。足の形、身体の重さ、歩行の速度、地面の硬さ、水分、傾斜などが接触した結果として生じる。したがって印は、自己の内面を外部へ一方的に転写したものではなく、自己と自己以外の相互作用によって生成された第三項である。

この意味で印は、自己表現に先行する。自己が「何を表現したか」を意識する以前にも、存在は世界との接触によって印を残している。印は意図によって制作される場合もあれば、意図されずに生じる場合もある。意図の有無よりも、接触が現実に差異を生じさせ、その差異が後続する存在によって感受または解釈されうることが重要である。

3.2　痕跡と記号の差異

印は記号になりうるが、最初から記号なのではない。

記号は、一定の規則や慣習のもとで、何かを意味し、代理する。これに対して印は、意味が確定される以前に、何かが起こったことを示す現実的な痕跡である。印は「何を意味するか」よりも先に、「何かがここに接触した」という出来事を保持している。

煙が火の印として読まれ、足跡が動物の移動を示すものとして解釈されるとき、痕跡は記号的機能を獲得する。しかし煙も足跡も、人間による解釈のために生じたのではない。それらはまず現実的な因果関係のなかで生成され、その後に意味を与えられる。

この順序は、現実接地を理解するうえで重要である。記号が印から切り離されるとき、意味は現実との接触を失い、別の記号だけを参照し始める。記号の体系は高度に複雑化できるが、その複雑性は必ずしも現実との関係を保証しない。

印は、記号を現実へ引き戻す。印には、記号化によって完全には回収できない物質性、偶然性、抵抗および時間が残されている。印を読むとは、既成の意味を適用するだけではなく、意味が生まれる以前の接触へ遡ることである。

3.3　印と自己外部化

自己外部化において、自己は外部へ印を残す。しかし、その印は自己の所有物として完全に管理されない。

発話された言葉は、聞き手の記憶と解釈のなかで変化する。制作された作品は、素材の劣化、展示場所、時代背景および観者との接触によって、作者が予測しなかった意味を獲得する。生活の行為も、建物、道具、身体、制度および他者の記憶に印を残す。

このとき自己は、自分自身を外部へそのまま複製しているのではない。自己と自己以外との接触から、自己にも自己以外にも還元できない印が生まれている。

したがって自己外部化には、必然的に自己の変形が含まれる。外部化された自己は、すでに内部にあった自己と同一ではない。印となった自己は、他者によって受け取られ、異なる文脈へ置かれ、別の生成の契機となる。

この自己外部化の非同一性が、文化生成を可能にする。もし外部化されたものが自己と完全に同一であり続けるならば、他者はそれを受け取ることはできても、変形し継承することはできない。印が自己からずれるからこそ、印は自己を越える。

3.4　印と自己以前性

印は、完成した自己の意図だけから生まれるのではない。自己が自分自身を認識する以前から、身体は環境へ痕跡を残し、環境も身体へ印を残している。

傷、癖、姿勢、言語の抑揚、手の動き、生活のリズムなどは、自己が意識的に選択したものだけではない。家族、土地、労働、教育、道具、制度および過去の経験が、身体に印として蓄積されている。

自己は、自らがつけた印だけで構成されるのではない。自己以外から受け取った印によっても形成される。自己とは、自己の印と自己以外の印が重なる場所である。

このため、自己以前性は自己の内部に残っている。自己以前性は、自己が成立した瞬間に消滅する過去ではない。それは、自己が完全な起源ではないことを示す痕跡として、現在の身体、言語、判断および行為のなかに作用し続ける。

自己の形成を理解するには、自己が何を表現したかだけでなく、自己に何が印されているかを問わなければならない。

3.5　印と人間以前性

印は人間固有のものではない。

動物の足跡、植物の成長、川の流路、風化した岩、地層、化石、巣、獣道などは、人間の意図と意味づけに先立って形成される。これらは、人間が世界を文化化する以前から、存在同士の接触と反復が世界に差異を残してきたことを示している。

人間は、印を最初に生み出した存在ではない。人間は、人間以前から存在する印を読み、それを別の形へ変換し、意図的な記録と象徴へ発展させた存在である。

したがって文化の起源を人間の純粋な創造だけに求めることはできない。文化は、人間以前の世界に存在する反復、痕跡、周期、地形、素材および生命活動を受け取り、それらを人間的な型と形へ変換することによって生成される。

人間以前性は文化の外部ではない。それは文化が継承し、変形し続ける基層である。

3.6　獣道における印の反復

獣道は、印から型が生成される原初的な過程を示している。

一頭の動物が土地を通過するとき、足跡、折れた草、匂い、土の変化などが残る。その一回的な痕跡だけでは、まだ道は成立していない。しかし、同じ場所を複数の動物が繰り返し通過すると、痕跡は重なり、後続する移動を方向づける。

最初の通過が後の通過を完全に決定するわけではない。地形、天候、食物、水場、危険、季節および動物同士の関係によって、経路は変化する。それでも反復された印は、移動の可能性を局所的に集中させる。ここに道の萌芽がある。

獣道は、設計図にもとづいて上から建設されたものではない。それは複数の個別具体的な移動が重なり、後続する身体へ方向を与えることによって創発する。

このとき道は、個別の足跡を越えるが、足跡から独立してはいない。道には一般性があるが、その一般性は個別的な通過を捨象した抽象法則ではない。個々の通過が重なり、次の通過に開かれることで生じた個別具体的普遍性である。

3.7　人間の道と色気

獣道と人間の道を単純に分けることはできない。人間も地形、水、危険、身体的負荷および反復的移動に従って道を形成する。一方、動物の道にも選択、学習、伝達および環境への応答がある。

それでも人間の道には、機能的な移動経路を越える関係が蓄積されうる。記憶、物語、祈り、禁忌、出会い、別れ、商い、権力、歓待、排除および死者との関係が、道の形の内部に重ねられるからである。

美学者母が、獣道と人間の道を分ける契機として「色気」を挙げるのは、この点に関係する。

色気とは、未特定の未来が形の内部に感受される関係力である。人間の道は、現在の移動を可能にするだけでなく、まだ出会っていない者、まだ到着していない場所、帰還できるか分からない将来、過去にそこを通った無名の存在を感じさせる。

ただし色気を、人間だけが所有する本質として固定してはならない。獣道にも、未知の方向、他の生命の気配、反復されうる未来が形の内部に現れている。人間の道においては、その未特定性が記憶、象徴、物語、儀礼および制作を通して多層化されるのである。したがって、獣道と人間の道を分けるのは絶対的な境界ではない。人間以前的な道に、文化的継承と色気が重なり、道が複数の時間を担うようになることが重要である。

3.8　印から型への境界

一つの印が、いつ型になるのか。この境界を、反復回数だけによって決めることはできない。

同じ痕跡が何度も繰り返されても、それが後続する行為へ関係を開かなければ、単なる物理的反復にとどまる場合がある。反対に、一度だけ生じた印であっても、それが他者によって受け取られ、異なる状況で再び行為を生成するならば、型の契機となりうる。

印が型になるのは、痕跡が過去の結果であるだけでなく、未来の行為を可能にする関係へ転じるときである。

足跡が単に「誰かが通った」という過去を示すだけでなく、「ここを通ることができる」という未来の可能性を開くとき、印は型へ近づく。ある制作上の痕跡が模倣される対象ではなく、別の制作を可能にする方法として受け取られるとき、印は型になる。

したがって印から型への境界は、物質的痕跡と抽象形式の間にあるのではない。過去の接触が、後続する存在に未特定の未来を開く瞬間にある。

3.9　印の可読性と不可読性

印は、常に完全に読めるわけではない。誰が、いつ、なぜ残したのか分からない印もある。風化、断片化、文脈の喪失によって、本来の意味を復元できない場合もある。

しかし不可読性は、印が無意味であることを意味しない。誰が残したか分からないからこそ、印は特定の主体への帰属を越えて、現在の受け手に問いを開くことがある。

グラフィティ、古い道具の摩耗、建物の傷、石や木に結ばれたしめ縄、作者不明の民具などに接するとき、見る者は、そこに自分ではない誰かの行為を感じる。誰かは分からない。しかし自分ではない者が存在し、世界に作用したということは分かる。

この「自分ではないという信頼」は、無名性の原初的な経験である。印の不可読性は、意味の欠如ではなく、特定の意味へ閉じられない接続可能性となる。

ただし、不可読性を無条件に神秘化してはならない。印を残した主体の責任や、歴史的な暴力の痕跡まで無名性の美学に回収すれば、加害、排除および所有の問題を隠すことになる。印の開放性と、その出自を検証する責任は両立しなければならない。

3.10　科学的データとしての印

科学におけるデータも、現実との接触から残された印として考えることができる。

温度計の数値、顕微鏡画像、センサーの記録、実験反応、観測波形、調査回答などは、対象そのものではない。それらは、対象、測定装置、観察条件、分類体系および研究者の操作が接触した結果として生成された痕跡である。

データを印として捉えることは、データの客観性を否定することではない。むしろ、データがどのような関係から生成されたのかを明示することによって、その妥当性を精密に検討できる。

測定装置には感度と限界があり、分類には選択と捨象があり、記録には誤差と欠落がある。これらの条件を隠してデータを「現実そのもの」とみなすとき、科学的印は一般抽象的な記号へと自己閉鎖する。

反対に、データを現実的接触の印として扱えば、その生成条件、再現可能性、誤差、適用範囲および責任を問うことができる。科学的厳密さとは、印から条件を消去することではなく、印が生じた条件を他者による検証へ開くことである。

3.11　印の制度化と危険

印が記録され、分類され、集積されると、それは制度的な判断の根拠となる。戸籍、成績、診断記録、信用履歴、アクセス履歴、購買履歴、位置情報などは、人間の行為が制度に残した印である。

これらの印は、個別具体的な生活の一部を可視化する。しかし制度は、その断片的な印を人格、能力、危険性または価値の全体と同一視することがある。

印が主体の全体を代理するようになるとき、個別的存在は、過去に残されたデータによって未来を決定される。印は未来を開く契機ではなく、未来を閉じる分類となる。

とりわけアルゴリズムによる予測と評価では、膨大な印が一般抽象的なモデルへ変換され、そのモデルが再び個人を判断する。個別から抽出された一般性が、個別の可能性を事前に制約するのである。

ここでも問題は、記録や抽象化そのものではない。印がどのような接触から生じ、何を含み、何を含まないかが忘却されることにある。印をその生成条件へ戻すことは、制度的判断を現実へ再接地するために必要である。

3.12　印と創造

創造は、無から完全に新しいものを生み出すことではない。自己以前・人間以前から存在する印を受け取り、それらの関係を変え、新たな印を現実へ残すことである。

制作する者は、既存の言語、素材、技術、型、場所および他者の作品を継承している。しかし創造は、それらをそのまま再生産することではない。個別具体的な身体と現実が接触することで、既存の関係に還元できない差異が生じる。

この差異が新しい印である。

創造への尊敬とは、新奇な商品や独創的な個人を称賛することだけではない。交換不可能な一つの接触が、既成の一般性を変化させ、まだ存在しない関係を開くことへの尊敬である。

現代社会が創造への尊敬を失っているとすれば、それは創造を一般抽象的な評価、価格、指標、話題性または再生可能な様式へ還元しているからである。完成した成果だけを評価し、その成果がどのような個別具体的接触から生じたかを見なくなる。

印に戻ることは、創造をその生成の現場へ戻すことである。

3.13　印の普遍性

印は一回的である。一つの足跡、一つの傷、一つの筆触、一つの発話は、同じ条件で完全に再現できない。しかし、その一回性は普遍性の反対ではない。

印が自己以外によって感受され、別の行為を生み、未来へ継承されるとき、その印は個別具体的普遍性を獲得する。ここで普遍化されるのは印の物理的形状ではなく、接触から新たな関係が生じうるという可能性である。

一般抽象的普遍性は、複数の印から共通する特徴を取り出す。個別具体的普遍性は、一つの印の交換不可能性を保持しながら、その印を自己以外へ開く。

両者は印において分岐する。印の差異を保持し、その差異から他者との関係を開けば、個別具体的普遍性が生じる。印の共通性を抽出し、反復可能な形式へ変換すれば、一般抽象的普遍性が生じる。

しかし、この分岐は完全な分離ではない。個別具体的な印がなければ抽象化は始まらず、抽象的な分類がなければ印の比較と継承は困難になる。印は、二つの普遍性が同じ生成根から分化する最初の場所なのである。

第4章　型の存在論――差異を含む反復と文化的普遍性

4.1　型とは何か

型とは、同じ形を複製するための固定的な鋳型ではない。本論における型とは、ある個別具体的な印が、異なる身体、場所、素材および時間において再び生成されることを可能にする関係構造である。

印が過去の接触によって残された差異であるのに対し、型は、その差異を未来の行為へ開く。したがって型は、過去の保存形式であると同時に、未来の生成条件である。

型は、完成した形の背後にある抽象的設計図とも異なる。設計図は、実現されるべき形をあらかじめ規定できる。これに対して型は、反復の方向を与えるが、最終的に生まれる形を完全には決定しない。

型を受け取る身体、素材、環境、技術および状況が異なるため、型の反復は必ず差異を生む。その差異を排除するのではなく、差異を含みながら関係を継承することが、型の本質である。

4.2　型と形の区別

型と形は密接に関係するが、同一ではない。

形は、ある時点において感覚可能になった具体的なまとまりである。視覚的形態だけでなく、音、動作、配置、文章、儀礼、制度および生活の構成も形になりうる。

これに対して型は、複数の形を生み出す生成的関係である。型は形の外部にある純粋な理念ではなく、過去に実現された複数の形と、それらを反復してきた身体的実践のなかに潜在している。

一つの形から型を読み取るためには、その形を完成した対象として見るだけでは足りない。どのような動作、順序、力、間、素材との応答および他者との関係によって、その形が成立したのかを見なければならない。

形だけを模倣すれば、表面的な類似は生まれる。しかし型を継承するには、形を生み出した関係と生成過程を受け取る必要がある。

したがって、型は形よりも深い本質として存在するのではない。型は、形がどのように生まれ、別の形へ移行しうるかという生成可能性である。

4.3　型と反復

型は反復によって成立する。しかし、型の反復は同一物の再生産ではない。

完全に同一の反復が可能であるならば、反復する主体、場所、素材および時間の差異は意味をもたないことになる。しかし現実の反復では、身体の状態、道具の癖、環境、技術の習熟度、時代的条件などが毎回異なる。

型は、この差異を消去するのではなく、差異のなかで何が継承されるべきかを方向づける。したがって型には、保持と変形が同時に存在する。

保持だけを求めれば、型は硬直した規則となる。変形だけを求めれば、何が継承されているのかが失われる。型は、その間で反復の同一性と差異を調整する。

この調整は一度で完成しない。反復されるたびに、型そのものが読み直される。ある反復が失敗とみなされることで、型の条件が明確になる場合もある。反対に、従来は逸脱とみなされた実践が、型に潜在していた別の可能性を開く場合もある。

型は、反復されながら自己を変化させる。

4.4　型と身体

型は、命題や規則としてのみ継承されるものではない。多くの場合、型は身体的な実践として継承される。

道具の持ち方、身体の重心、呼吸、速度、力の抜き方、他者との距離、始める時機、終える判断などは、言語によって完全には説明できない。これらは、見ること、真似ること、失敗すること、修正されること、繰り返すことによって身体へ蓄積される。

この身体的継承は、単なる無意識的習慣ではない。型を身につけるとは、身体が環境、素材、道具および他者の変化に応答できるようになることである。

型を完全に自動化された動作とみなすならば、型は自由や創造性に対立する。しかし生成学的に捉えられた型は、身体を固定するのではなく、未知の状況へ応答するための余地を身体に形成する。

熟達した身体は、型を意識せずに繰り返す身体ではない。型の内部にある差異を感受し、状況に応じて型を変形できる身体である。

4.5　無名性に気づかなければ、型には気づかない

型は、特定の一人によって意図的に発明される場合がある。しかし文化に定着した型の多くは、誰か一人の発明へ還元できない。

複数の人間が反復し、修正し、受け渡してきた結果として、ある行為の仕方が成立する。その過程には無数の個別的判断と創造が含まれているが、それらすべての作者名が記録されるわけではない。

型の表面だけを見れば、それは昔から存在する自然な形式に見える。しかし、無名性に気づくならば、その型が無数の名を失った個別具体的な行為の集積であることが分かる。

ゆえに、「無名性に気づかなければ、型には気づかない」。

これは、型を匿名の集団精神へ還元する命題ではない。型を構成した個別的な創造が、特定の作者の所有を越えて継承されたことを意味する。

型の無名性は、作者が存在しなかったことではない。必ず誰かが行った。しかし、型が文化として成立するとき、その行為は一人の名だけでは回収できない関係となる。

4.6　型と文化的信頼

型を反復する者は、その型を自分が始めたのではないことを知っている。誰が最初に始めたのか分からない場合でも、先行する誰かの行為があり、その反復可能性が自分へ届いていることを信頼する。

この信頼は、権威への無条件の服従とは異なる。型が正しいから従うのではなく、自分以前に世界へ関わった他者の経験が、その型のなかに蓄積されていることを受け取るのである。

型は「自分ではない誰かが、すでにこの現実に接触した」という信頼を媒介する。そこでは自己の継承と自己以外の継承が重なる。

型を受け取る者は、自己以外から受け取った関係を自分の身体で反復する。その反復によって型は自己のものになるが、完全な所有物にはならない。型は次の他者へ渡されなければならないからである。

この継承は、過去への服従ではない。受け取った型を、現在の個別具体的現実へ接地し直し、必要に応じて変形しながら未来へ渡す責任である。

4.7　型と個別具体的普遍性

型は、個別具体的普遍性を文化的に継承する主要な構造である。

個別具体的な経験そのものを、別の人間が完全に再現することはできない。しかし、その経験から生じた行為の関係を型として受け取ることはできる。型を反復する者は、先

行者と同一の経験をするのではなく、自分の身体と現実を通して、先行する経験との関係を生成する。

このとき、型は個別性を一般性へ単純に変換しない。むしろ、異なる個別性が互いに接続するための共通する関係を形成する。

茶を点てる、筆を運ぶ、祈る、建物を修復する、田畑へ水を引く、道を歩くといった行為は、反復されるたびに異なる。しかし、その差異を含む反復のなかで、個々の行為を越えた文化的関係が持続する。

型の普遍性は、どこでも同じ結果を生むことにあるのではない。異なる場所と身体において、関係が再生成されうることにある。

4.8　型から一般抽象化へ

型は個別具体的普遍性を支える一方で、一般抽象的普遍性へ移行する契機も含む。

複数の反復から、共通する手順、順序、条件、比率または規則が取り出されるとき、型は明文化された方法へ変換される。手引き、規格、教科書、設計図、プロトコルおよびアルゴリズムは、型から抽出された一般抽象的形式である。

この変換によって、型は身体的な直接伝承を越え、より広い範囲に伝達可能になる。特定の師弟関係や土地に依存せず、異なる場所で同じ手順を学ぶことができる。

しかし、型のすべてが明文化できるわけではない。規則へ変換されたとき、状況に対する感受性、身体的判断、素材との応答、間、微細な調整などが捨象される場合がある。

一般抽象化された手順は、型の一部を可搬化するが、型の全体ではない。この差異を忘れると、マニュアルに従うことが型を身につけることと同一視される。

型は、規則を含む。しかし規則に尽くされない。

4.9　科学的再現可能性の型

科学的実験の再現可能性も、型の文化的継承によって支えられている。

実験手順が文章や数値として公開されても、それだけで同じ実験が再現できるとは限らない。装置の調整、試料の扱い、異常値の判断、微細な操作、作業環境の管理などには、明文化されていない身体的知識が含まれる。

研究者は、研究室、教育機関、共同研究、査読、学会などを通して、この科学的な型を身につける。科学的実践も、座に入り、席を占め、一定の位と責任を引き受けることによって継承される。

再現可能性とは、身体と文化を排除した純粋な同一反復ではない。異なる身体と場所において、比較可能な結果を生み出せるように型を調整する高度な文化的実践である。

したがって、科学的普遍性は型を克服したところに成立するのではない。型を明示し、批判し、修正し、広く共有できるようにしたところに成立する。

4.10　型の硬直化

型は文化生成を可能にするが、同時に行為を拘束し、差異を排除する力にもなりうる。

型が、自らを生み出した個別具体的現実との関係を失い、「正しい形」を再生産する規則として固定されるとき、型は硬直化する。そこでは反復が生成ではなく服従となり、型から外れる身体、表現、生活および関係が未熟または異常とみなされる。

このとき型は、個別具体的普遍性を継承する構造から、一般抽象的規範を個別へ強制する装置へ変化する。

伝統を守るという名目で、現在の身体と環境の変化を認めないことも、型の硬直化である。反対に、効率化や標準化によって型をマニュアルへ還元し、身体的・歴史的な蓄積を切り捨てることも、別の意味で型を固定する。

型を生かすためには、何を保持し、何を変えるべきかを、そのつど個別具体的現実において判断しなければならない。

4.11　型破りと形無し

型を変形することは、型を否定することと同じではない。型を十分に受け取り、その生成原理を理解したうえで、現在の現実に応じて別の形を生み出すことが「型破り」である。

これに対して、型との関係をもたないまま表面的な新奇性だけを求めるならば、その行為は何を変形したのかを示すことができない。継承される関係が存在しないため、差異そのものも明確にならない。

ただし、この区別を伝統的権威の擁護として用いてはならない。制度が承認した型だけが創造の前提になるわけではない。路上、生活、遊び、労働、周縁的共同体および人間以外の環境にも型は存在する。

グラフィティやスケートボーディングにおいても、身体の動作、場所の読み方、線の引き方、反復、失敗、模倣、署名および無名の技術継承が存在する。それらは公的制度によって型と認定される以前から、実践の内部で反復され変形されている。

型は制度が与えるものではない。個別具体的な反復が、他者の行為を可能にする関係へ転じるとき、型が生まれる。

4.12　型と創造

近代的な創造観は、しばしば創造を既存の型からの解放として理解する。独創的な個人が伝統を断ち切り、前例のないものを生み出すことが創造だとされる。

しかし、創造は型の不在からは生まれない。創造する者は、言語、技術、素材、先行作品、身体習慣および場所の構造をすでに継承している。創造とは、この継承を否認することではなく、継承された型を個別具体的現実へ接地し直すことである。

型を忠実に反復するだけでも、型を無視するだけでも、創造は成立しない。創造は、型の内部にまだ特定されていない未来を感じ取り、それを新しい形として現実化する。

ここで型と色気が結びつく。色気とは、未特定の未来が形の内部に感受される関係力である。型に色気があるとは、その型が一つの正解へ閉じず、まだ現れていない形を生み出す余地を保持していることである。

創造への尊敬とは、個人の新奇性への賛美ではない。無名の継承を受け取りながら、そこから交換不可能な新しい形を生み、さらに自己以外へ渡す行為への尊敬である。

4.13　型と文化の時間

型は過去を保存する。しかし、型の時間は過去から現在、現在から未来へ進む単純な直線ではない。

型を反復するとき、過去の行為は現在の身体において再び生成される。同時に、まだ存在しない未来の形が、現在の反復の可能性として現れる。型は、過去の蓄積と未特定の未来を現在へ畳み込む。

このため型には、自己以前性と自己以後性、人間以前性と人間以後性が重なっている。型は、自分が始めていない関係を受け取り、自分の死後にも続きうる関係へ変えて渡す。

文化の時間は、過去をそのまま保存する時間ではない。受け取るたびに過去が読み直され、渡すたびに未来の可能性が変化する時間である。

型は、その非線形な時間を身体と形のなかに保持する。

4.14　型の普遍性

型がもつ普遍性は、完全な同一性の反復ではない。型は、差異を含んだ反復を通して、異なる個別性を関係させる。

一つの型は、一つの形に固定されない。異なる形を生みながら、それらの間に継承関係を成立させる。この意味で型は、個別具体的普遍性を時間的に持続させる構造である。

同時に型は、反復可能な条件を抽出することで、一般抽象的普遍性への道を開く。文化的技術から科学的方法へ、身体的実践から明示的規則へ、局所的な継承から広域的な標準へと移行する契機が型には存在する。

しかし一般抽象化された形式は、型のすべてを包含しない。型には、身体、場所、素材、間、責任、記憶および色気が残る。

型は、個別と一般、過去と未来、自己と自己以外、名と無名性の間にある。型がこの多重性を保持する限り、それは文化的普遍性の生成基盤であり続ける。

第5章　形の存在論――感受可能性・色気・作品性

5.1　形とは何か

本論における形とは、固定した外観または幾何学的輪郭だけを意味しない。形とは、印と型を通して生成された関係が、身体によって感受可能なまとまりとして一時的に現れた状態である。

形には、視覚的形態だけでなく、音の構成、身体の動き、言葉の調子、行為の順序、空間の配置、制度の形式および人間関係の組織も含まれる。形とは、存在が他者との関係において現れる仕方である。

形は、内側にある本質を外側に表現した容器ではない。何かが形として現れることによって、内と外、部分と全体、自己と自己以外の関係そのものが成立する。

したがって形は、生成の結果であると同時に、次の生成を開始するインターフェイスでもある。形として現れたものは他者に感受され、触れられ、使用され、解釈され、変形される。その接触が新しい印を生み、別の型と形へ続いていく。

5.2　印・型・形の生成関係

印、型、形は、単純な時間順序によって一方向に並ぶものではない。

印は、接触によって残された差異である。型は、その差異を異なる条件のもとで反復可能にする関係構造である。形は、その型が特定の身体、素材、場所および時間において現実化したものである。

しかし形が生まれると、その形自体が新たな印となる。他者はその形に接触し、そこから型を読み取り、別の形を生み出す。そのため印・型・形は循環する。

型は形に先立つように見えるが、型は過去に生じた形の反復から読み取られる。形もまた、型を単に実現するのではなく、その反復によって型の意味と範囲を変化させる。

したがって、型は形の原因でありながら形の結果でもあり、形は型の結果でありながら型を更新する原因でもある。この再帰的関係が文化生成を持続させる。

5.3　形と個別具体性

あらゆる形は、個別具体的な条件のもとに現れる。同じ設計、同じ手順、同じ型にもとづいて制作されたとしても、素材、身体、環境、時間および使用の差異によって、完全に同一の形は生じない。

大量生産された工業製品も、抽象的な規格においては同一とみなされるが、物質的には微細な差異をもち、異なる場所と使用履歴を生きる。形は一般形式を担いながら、必ず個別具体的な存在として現れる。

この個別具体性は、一般形式の不完全な実現ではない。形が現実に存在するための条件である。完全に抽象的な形は、概念として想定できても、現実に現れるためには素材、尺度、位置および時間を引き受けなければならない。

形とは、普遍的関係が個別具体的現実に接地する場所である。

5.4　形と感受可能性

存在は、形を通して他者に感受される。しかし感受することは、形を客観的な情報として受け取るだけではない。

見る者、触れる者、聞く者、使用する者は、それぞれ異なる身体と席から形に接触する。したがって、一つの形は一つの意味だけを伝達しない。形は、複数の感受と解釈を生み出す。

この多義性は、形の情報伝達が不完全であることを意味しない。形が自己を一つの意味へ閉じず、異なる存在との関係を生成できることを示している。

ただし、形が何にでもなりうるわけではない。素材、構造、尺度、配置および歴史は、可能な感受と解釈を方向づける。形は完全に決定的でも、無制限に任意でもない。

形は、限定と開放が重なる境界である。

5.5　形と色気

色気とは、未特定の未来が形の内部に感受される関係力である。

色気は、装飾的な魅力、性的な誘惑、表面的な美しさだけを意味しない。それは、目の前に現れている形が、現在の用途、意味および分類だけでは尽くされず、まだ決定されていない別の関係へ開かれていることを感じさせる力である。

色気をもつ形は、すべてを明示しない。欠落、余白、歪み、摩耗、曖昧さ、縮尺のずれ、時間の痕跡、用途の不確定性などを通して、見る者や使う者に未来の関係を委ねる。

しかし、色気は単なる情報不足ではない。意味が少ないから色気が生まれるのではなく、形の内部に過去の生成と未来の可能性が同時に感じられるときに生まれる。

古い道の曲がり、使い込まれた道具、誰かの残した印、空席、修復された建物などには、それを形成した過去の行為が蓄積されている。同時に、それらは次に誰が通り、使い、

座り、住み、変形するのかを確定していない。この過去の蓄積と未特定の未来との重なりが、色気を生む。

5.6　色気と一般抽象化

一般抽象的普遍性は、対象の比較可能性と予測可能性を高めるために、形から偶然的差異を取り除く。測定可能な特徴を抽出し、分類し、標準化することで、形を共通形式として扱えるようにする。

この操作は、科学、工学、設計、製造および制度運営に不可欠である。しかし、形のすべてが一般抽象化されるわけではない。

形の内部にある未特定の未来まで、あらかじめ変数として確定すると、色気は失われる。形が何のために存在し、誰がどのように使用し、どのような結果を生むかが完全に規定されるならば、他者が新しい関係を生成する余地は小さくなる。

現代のインターフェイス、都市、制度および商品は、予測可能性と操作性を高める一方で、未特定の未来を排除する傾向をもつ。利用者の行動は選択肢、指標、推薦、評価および導線によって事前に方向づけられる。

その結果、形は滑らかで便利になりながら、他者との予期しない関係を生む力を失う。色気の喪失とは、装飾の不足ではなく、形から未特定の未来が失われることである。

5.7　形と作品性

作品性とは、ある対象が制度によって芸術作品として認定される性質ではない。作品性とは、生成された形が作者の意図、用途、所有および現在の文脈を越え、自己以外との新しい関係を生成し続ける存在様態である。

作品性をもつ形は、作者が伝えようとした内容だけに閉じない。それは他者の席から見直され、異なる時代と場所に置かれ、新たな意味と行為を生む。

この開かれは、作品が無制限に解釈できることを意味しない。素材、制作行為、歴史的条件および残された印は、形の現実的な抵抗として存在する。作品性は、作者の意図と観者の自由との中間にあるのではなく、両者が接触することで新しい関係が生成される位相である。

作品は完成したときに閉じるのではない。完成によって作者の直接的制作から離れ、他者との生成を開始する。この意味で、作品の完成は生成の終点ではなく、自己以後性への移行である。

5.8　作品性と無名性

作品性は無名性と深く関係する。

作品が作者の名だけに閉じている限り、それは作者の自己外部化を証明する所有物として扱われる。しかし作品が他者との関係を生成し始めると、その働きは作者の意図と名声だけでは説明できなくなる。

無名性とは作者名の消失ではない。作者を明示し、制作の出自と責任を保持したまま、作品の生成力が作者を越えることである。

名前をもたない作品にも作者は存在する。反対に、有名な作者の名をもつ作品にも無名性は成立しうる。重要なのは名前の有無ではなく、生成された形が特定の自己によって所有し尽くされているか、それとも自己以外へ開かれているかである。

作品性は、名の責任と無名性の開放性を重ねる。作者は自らの行為に責任を負うが、作品の未来を独占できない。

5.9　形と空席

空席は、単に誰も座っていない席ではない。それは、まだ特定されていない存在が関係へ参加できる可能性を形として保持している。

椅子が置かれていても、誰が座るかが完全に決められているならば、その席の未来は閉じている。これに対して空席は、過去に誰かが座っていた痕跡を残しながら、次に誰が座るかを確定しない。

空席には、自己以前性と自己以後性が重なる。現在の自己がその席を作ったのではないかもしれず、現在の自己が去った後にも別の存在がそこへ座りうるからである。

空席の力は、不在そのものにあるのではない。不在が新しい参加者を迎え入れる形として保持されていることにある。空席は、未特定の未来を具体的な形として現前させる。

この意味で空席は、色気をもつ。誰が来るのか、何が始まるのかが決まっていないにもかかわらず、関係が生じうることが形の内部に感受されるからである。

5.10　形、縮尺、余白

形は、尺度によって世界との関係を形成する。縮尺は、対象を単に小さくまたは大きく再現する技術ではない。身体と世界の距離を組み替えるインターフェイスである。

盆栽は大木の縮小模型ではない。木、山、水、時間、手入れ、鑑賞者の身体が、限られた尺度のなかで新たな関係を形成する。枯山水も自然景観の不完全な複製ではなく、石、砂、余白および身体の位置によって、自然との関係を別の位相へ変換する。

縮尺によって形が圧縮されると、現実のすべてが再現されるわけではない。何かが省かれ、余白が生まれる。その余白において、見る者は自己の記憶、身体、想像および未来を形へ接続する。

余白は情報の欠如ではない。異なる個別性が形に参加するための非占有的な席である。形がすべてを埋め尽くさないことによって、他者が関係を生成する余地が生まれる。

5.11　形と科学的モデル

科学的モデルも、一つの形である。

数式、模式図、シミュレーション、分類体系および理論モデルは、現実の関係を選択し、抽象化し、感受または操作可能なまとまりとして提示する。モデルは現実そのものではないが、現実について考え、予測し、検証するための強力なインターフェイスとなる。

モデルの科学的価値は、現実のすべてを再現することにはない。何を含み、何を除外し、どの条件下で有効なのかを明示しながら、特定の関係を検証可能にすることにある。

しかし、モデルの形が現実そのものと同一視されるとき、一般抽象的普遍性の自己絶対化が起こる。モデルに含まれない現実は、存在しないもの、誤差、例外または非合理として排除される。

モデルを印と現実へ再接地するには、その形がどのような観察、型、装置、選択および目的から生成されたのかを問い直さなければならない。科学的モデルもまた、形である以上、特定の席と位から構成された文化的生成物なのである。

5.12　形とシミュレーション

形は現実との接触から生まれるが、シミュレーションは、既存の形と記号の関係を再構成することによって、まだ現実化していない状態を提示できる。

シミュレーションは、将来を検討し、危険を予測し、別の可能性を試すために不可欠である。しかしシミュレーションが現実接地を失うと、形は他の形だけを参照し、記号的な整合性が現実性に代わる。

色気とシミュレーションは、ともに未現実の未来に関係するが、同一ではない。シミュレーションは一定の条件とモデルによって可能な未来を計算または再現する。色気は、まだ条件も内容も特定されていない未来が、現在の形の内部に感受されることである。

シミュレーションは未来を形にする。色気は、未来がまだ一つの形へ確定されていないことを形の内部に保持する。

この差異を失うと、予測された未来だけが可能な未来として扱われる。現代の閉塞は、将来が不足していることだけではなく、あらかじめ計算可能な将来によって、未特定の未来が覆い尽くされていることにある。

5.13　形と一般抽象的規格

規格は、異なる形の間に互換性、安全性、効率性および共有可能性を成立させる。建築、工業製品、情報通信、医療などにおいて、一般抽象的規格は不可欠である。

しかし、規格は現実に現れるすべての身体、場所および使用を包含しない。標準的な身体、平均的な使用者、典型的な環境を想定することで、規格から外れる個別具体的存在が生まれる。

規格から外れる存在を単なる誤差として扱うならば、一般抽象的普遍性は排除の装置となる。反対に、あらゆる個別差へ完全に対応しようとすれば、規格の共有可能性が失われる。

必要なのは規格の廃棄ではなく、規格がどの個別具体的条件から抽出され、誰を含み、誰を取り残しているのかを可視化することである。例外は普遍性の失敗ではない。普遍性がまだ開かれていない別の個別性を示す印である。

5.14　形の完成と非閉鎖性

形には輪郭が必要である。何らかの限定がなければ、形は他のものから区別されず、感受することもできない。しかし、輪郭をもつことは完全に閉じることではない。

生成的な形は、一定の完成をもちながら、他者との接触によって別の関係を生み出せる。完成と非閉鎖性は両立する。

作品が完成するとは、すべての意味と未来が決定されることではない。作者による直接的な制作が一区切りを迎え、形が自己以外との関係へ委ねられることである。

完全という観念が、変更不能性、無誤謬性、例外の不在および説明の完結を意味するならば、その形は文化生成を閉じる。これに対して生成的完成とは、形が他者へ渡せるだけのまとまりをもちながら、その未来を独占しないことである。

5.15　形の普遍性

形は、個別具体的でありながら普遍的になりうる。

それは、形が一般概念の完全な実例だからではない。その形にしかない素材、尺度、時間、傷、配置および履歴が、他者の異なる経験へ接続するからである。

形の普遍性は、同じ意味をすべての者へ伝えることではない。一つの形が、異なる席にいる者たちに、異なる関係を生成することにある。

一般抽象的普遍性は、複数の形から共通形式を抽出する。個別具体的普遍性は、一つの形がもつ交換不可能性を保持しながら、その形を自己以外へ開く。

形は、この二つの普遍化が交差する場所である。形が規格と分類だけに還元されれば、未特定の未来は失われる。形が私的な固有性だけへ閉じれば、他者へ継承されない。

型から形が生まれ、形が新たな印となり、他者との接触を通して再び型を生成する。この非閉鎖的循環のなかで、個別具体的普遍性は文化的普遍性へ展開し、一般抽象的普遍性は現実へ再接地されるのである。

第6章　座・席・位の存在論――関係・位置・公共性の生成

6.1　形から座へ

形は、それ単独で存在するのではない。形が感受され、使用され、解釈されるためには、複数の存在が関係できる場が必要である。本論では、その関係生成の場を「座」と呼ぶ。

座とは、完成した共同体や固定された組織の名称ではない。複数の存在が集まり、互いの差異を保持しながら、一時的または持続的な関係を形成する位相である。

形が座へ置かれると、その意味と働きは変化する。同じ物であっても、美術館、民家、学校、路上、寺院、研究室など、どの座に置かれるかによって、異なる関係を生む。逆に、一つの形が置かれることによって、既存の座そのものが組み替えられる場合もある。

したがって座は、形を受け入れる中立的な容器ではない。形と人間、場所、制度、歴史が接触し、それぞれの位置と意味を変化させる生成的インターフェイスである。

6.2　座とは何か

座は、単なる物理的集合ではない。同じ場所に複数の人間が存在していても、相互関係が成立しなければ、生成学的な意味での座とは限らない。

座が成立するためには、誰が参加しうるのか、どのように発言し行為できるのか、何を共有し、どの差異を保持するのかという関係構造が必要である。

座は個別性を共同体へ溶解させるものではない。むしろ、個別性が互いに関係できるように、それぞれの席を成立させる。座がなければ席はなく、席がなければ座は抽象的な集合にとどまる。

座と席は相互に生成する。座が席を与え、席を占める個別的存在が座の性格を変える。この再帰的関係によって、座は固定した枠組みではなく、参加のたびに更新される文化的な場となる。

6.3　席とは何か

席とは、座の内部において個別具体的な存在が占める、交換不可能な位置である。

席は、椅子や指定された場所だけを意味しない。発言する位置、見る位置、責任を負う位置、働く位置、待つ位置、迎える位置など、関係の内部で個別的存在が置かれる具体的な立場を指す。

二人が同じ対象を見ても、完全に同じ経験をすることはできない。身体、記憶、知識、距離、時間および関係が異なるからである。それぞれは異なる席から対象に接触する。

席の交換不可能性は、他者理解を不可能にするものではない。自分が他者の席を完全に占められないからこそ、他者の発言、痕跡および応答が必要になる。

個別具体的普遍性は、この交換不可能な席から生まれる。普遍性とは、すべての者が同じ席へ移動することではなく、異なる席が関係可能になることである。

6.4　空席と未特定の他者

席は、誰かによって占められている場合だけに存在するのではない。空席もまた、座を形成する積極的な働きをもつ。

空席は、現在そこにいない者、まだ到着していない者、すでに去った者、死者、将来世代、人間以外の存在の参加可能性を保持する。

すべての席が既存の成員によって占有され、参加者と役割が完全に確定されているならば、その座は自己を再生産するだけになる。空席があることで、座は未知の他者によって変化しうる。

ただし空席は、単なる人数上の余裕ではない。「誰でも参加できる」と宣言しながら、実際には既存の規則、言語、資格および暗黙の慣習が参加を妨げることもある。生成的な空席には、他者が既存の座へ同化せず、座そのものを変えうる余地が必要である。

空席は、未来を予定された参加者で埋めるのではなく、未特定の他者に開いておく形である。

6.5　位とは何か

位とは、固定的な身分や序列だけを意味しない。本論における位とは、ある存在が関係全体のなかで成立させている差異的な位置、働き、強度および責任である。

席が個別具体的な存在の占める位置であるのに対して、位は、その位置が他の位置との関係によってどのような意味と作用をもつかを示す。

同じ席に座っていても、発言権、専門性、責任、経験、権限、他者からの信頼などによって位は異なる。また、同一人物の位も、座が変われば変化する。教師が別の座では学ぶ者となり、宿の主人が別の関係では客となることがある。

したがって位は、人間に内在する不変的属性ではない。座と席の関係から生成される位相的差異である。

位には力が伴う。何を決定できるか、誰の声が聞かれるか、誰が責任を負うかは、位によって方向づけられる。そのため位を論じることは、権力と倫理を論じることでもある。

6.6　座・席・位の相互生成

座・席・位は、上位から下位へ配分される階層的な三段階ではない。それらは相互に生成する。

座は、複数の席が関係することによって成立する。席は、座の構造によって可能になり、その席が他の席とどのように関係するかによって位が生じる。位の配置は、誰が参加し、発言し、決定できるかを方向づけ、座の性格そのものを変化させる。

この循環が固定されると、座は制度となる。制度化は、関係を持続させるために必要である。しかし制度化された座は、既存の席と位を自然で普遍的なものとして固定する危険をもつ。

特定の位にある者だけが正しい知識を所有し、特定の席にある者だけが発言できるとされるとき、座は個別具体的な生成を閉じる。

反対に、すべての席と位の差異を無意味として消去すれば、技能、経験、責任および判断の所在が失われる。必要なのは、位を否定することではなく、位がどのように生成され、何によって正当化され、誰に対して責任を負うのかを開示することである。

6.7　座と公共性

公共性は、私的差異が消去された均質な空間ではない。それは、異なる席と位をもつ存在が、共通の問題へ関係できる座の構造である。

一般抽象的な公共性は、すべての参加者を同一の権利主体として扱う。この形式は、身分、出自、性別、信仰などによる恣意的差別を制限するために不可欠である。

しかし、形式的に同じ権利が与えられていても、現実の身体、資源、言語能力、移動可能性、歴史的排除などの差異によって、同じように参加できるとは限らない。

個別具体的公共性は、すべての者を同じものとして扱うのではなく、それぞれがどの席に置かれ、どのような条件によって参加を妨げられているかを問う。

したがって公共性には、一般抽象的な平等と個別具体的な参加条件の双方が必要である。形式的平等だけでは現実の不平等が隠され、個別的事情だけでは共通規準が失われる。

公共性とは、この二つを完成した調和へ統合することではなく、その緊張を開かれた座として維持することである。

6.8　西洋的個人と日本的自己

近代西洋における個人概念は、権利、所有、意思、責任および法的同一性を担う自律的主体として形成されてきた。この概念は、共同体的身分から人間を解放し、一人ひとりを普遍的な権利主体として扱ううえで大きな役割を果たした。

しかし個人が、関係に先立って完成した自己として理解されるとき、身体、家族、言語、場所、自然および他者への依存が二次的なものとして扱われる。

日本に近代西洋と同一の個人概念が「そもそも存在したか」という問いには、単純な有無では答えられない。日本にも固有の意思、責任、所有、名誉および個人性は存在した。しかし、その自己は、家、座、身分、職能、土地、宗教的関係などのなかで位置づけられる傾向が強かった。

ここでいう日本的自己は、集団に服従する自己という意味ではない。自己が席と位の関係から生成され、そのつど異なる役割と責任を引き受ける関係的自己である。

ただし、この関係性は調和だけを生むものではない。固定した位、排他的共同体、同調圧力および責任の拡散を生みうる。したがって日本的自己を近代的個人主義に代わる理想として美化することはできない。

6.9　現代日本における無秩序

現代日本では、近代的個人主義と関係的な日本的自己が、十分に統合されないまま重なっている。

個人には自己決定、自己責任、独自性および成果が求められる。一方で、実際の社会関係では、所属、空気、暗黙の役割、年齢、肩書、組織内の位が強く作用する。

その結果、権利については個人として扱われながら、責任については関係に埋め込まれ、選択については自由を要求されながら、評価については座の規範に従うという矛盾が生じる。

個人主義が一般抽象的な自己像として導入され、日本的な座・席・位の構造が無自覚に残存するとき、両者は相互に補完せず、責任の所在と関係の基盤を不明確にする。

現代の無秩序とは、個人主義が強すぎることや共同体が弱くなったことだけではない。個人と関係、権利と位、自由と責任を媒介する座が生成力を失っていることである。

6.10　座の閉鎖と評価のレバレッジ

座が制度化されると、席と位は評価、資格、肩書、業績、価格および数値によって配分されるようになる。

評価は、ある行為や成果を認識するために必要である。しかし、既存の評価が次の評価の根拠となり、評価された者にさらに機会と資源が集中するとき、評価はレバレッジ構造を形成する。

高い位にある者の発言は内容以前に信頼され、低い位または座の外にいる者の発言は検討される前に排除される。このとき、一般抽象的な評価が個別具体的な接触に先行する。

作品を見る前に作者名や市場価格で価値を判断し、論文を読む前に所属や引用数で信頼性を決め、人物と出会う前に属性データで可能性を予測する。こうして座は、新しい個別性を迎える場所ではなく、既存の位を再生産する装置になる。

空席が形式的に存在しても、既存の評価をもたない者が実際には座れないならば、その座は開かれていない。

6.11　科学共同体という座

科学的知識は、孤立した個人の認識だけでは成立しない。研究室、大学、学会、査読、学術誌、データベースおよび教育制度からなる科学共同体という座を必要とする。

研究者は、その座において特定の席を占める。専門領域、所属、研究歴、使用できる装置、資金、言語などによって、研究者の位と発言可能性は異なる。

科学的客観性は、この差異を完全に消去することではない。異なる席から提出された証拠と推論が、相互に検証されうる関係を形成することである。

しかし科学共同体も、権威、資金配分、学術言語、地域格差、ジェンダー、所属機関などによって閉鎖されうる。その閉鎖性が不可視化されると、特定の座から形成された知識が、無位置で完全に中立的な知識として提示される。

科学的普遍性を強くするためには、科学の座を否定するのではなく、その席と位の条件を可視化し、批判と新規参加へ開く必要がある。

6.12　観察者の席と客観性

観察は、必ずどこかから行われる。観察者は、特定の身体、装置、理論、言語および歴史的条件をもつ席にいる。

一般抽象的客観性は、この席の差異を制御し、結果から観察者の恣意性を減少させようとする。これは科学に不可欠な操作である。しかし、観察者の席を完全に消去できるわけではない。

測定装置の選択、対象の限定、分類項目の設定、誤差の扱い、研究課題の決定などには、観察者と制度の位置が関与する。必要なのは、位置をもたないと装うことではなく、位置を明示して他の席から検証できるようにすることである。

客観性とは無席性ではない。それは、席の複数性と相互検証可能性である。

この理解によって、個別具体的な視点と科学的客観性は対立しなくなる。個別的な席を消去するのではなく、それを開示し、複数の席を関係させることで、より強い客観性が成立する。

6.13　位と倫理

倫理は、一般的な規則を個別的状況へ適用することとして理解されることがある。しかし実際の倫理的行為は、誰が、どの席と位から、誰に対して、どのような力をもって行為するのかに関係する。

同じ行為でも、位が異なれば意味と責任は異なる。権限をもつ者の沈黙と、発言を禁じられた者の沈黙は同じではない。迎える側と迎えられる側、教える者と学ぶ者、研究する者と研究対象となる者では、負うべき責任が異なる。

一般抽象的倫理は、すべての者に適用される規則を与える。それは恣意的な例外と権力濫用を防ぐために不可欠である。しかし規則だけでは、個別の席と位に伴う非対称性を十分に扱えない。

個別具体的倫理は、規則を否定するのではなく、規則が適用される具体的関係を問う。自分の位が他者にどのような力を及ぼしているか、他者の席がどのように制約されているかを感受し、応答する。

倫理は、一般原則と個別的応答の非対称的循環として成立する。

6.14　道、公界、座

道は、固定した座の外部にあるだけではない。異なる座の間を移動し、それらを接触させ、時に新たな座を発生させる。

道を行き交う者は、家、村、寺院、市場、国家などの所属から一時的に距離をもちうる。しかし道にも権力、危険、規則、関所、排除が存在する。道を自由の象徴として一面的に美化することはできない。

公界的な道は、こちらとあちらのいずれにも排他的に属さず、両者を分けながら接続する。そのため、既存の座と位を横断し、異なる個別性を関係させる可能性をもつ。

道の上では、移動する者同士の一時的な座が生まれる。宿、橋、市、辻、休息所、寺社などは、異なる所属をもつ者が接触する席を提供する。そこでは既存の位が弱まり、新しい位が生まれることもある。

したがって公界は、すべての位が消滅する無秩序な空間ではない。既存の座によって固定された席と位が組み替えられる可能性をもつ境界的な座である。

6.15　狭山美学校という重層的な座

狭山美学校は、民宿、住居、学校、研究所、作品、地域的場所という複数の形を重ねている。いずれか一つの制度へ完全に還元することはできない。

宿泊者は客であると同時に、場所を一時的に構成する参加者になる。生活者は管理者であると同時に、場所から影響を受ける滞在者でもある。制作、研究、宿泊および日常生活が分離されずに接触することで、それぞれの席と位が変化する。

この重なりは、役割を無秩序に混同することではない。宿泊者の安全、生活者の私的領域、研究と作品の責任など、区別すべき境界は存在する。重要なのは、その境界を固定的な壁としてではなく、関係を調整するインターフェイスとして扱うことである。

狭山美学校は、完成した共同体を提示するのではない。異なる者が一時的に席をもち、その接触によって座そのものが変化する個別具体的な実践である。

6.16　座・席・位と普遍性

一般抽象的普遍性は、誰がどの席にいるかにかかわらず妥当する規則を目指す。個別具体的普遍性は、誰もが異なる席にいることを保持しながら、それらの席を関係させようとする。

前者だけでは、無位置の普遍性が想定され、実際に規則を形成した座と位が不可視化される。後者だけでは、各々の位置が閉じ、共通の判断と責任が成立しない危険がある。

普遍性は、席を消去することでも、席を絶対化することでもない。異なる席から共通の問題へ接近し、その相互作用によって座と位を更新し続けることである。

座は普遍性の共有空間であり、席は普遍性が個別具体的に生じる位置であり、位はその関係に伴う力と責任である。

普遍性が多重であるとは、すべての席が同じことを意味しない。異なる席と位が、相互に還元されることなく、一つの生成的な座を形成できることである。

第7章　道と公界の位相論――分離・接続・移動の多重性

7.1　本章の位置づけ

本章は、論文全体を「道とは公界である」という単一命題へ還元するものではない。道と公界の関係を、個別具体的普遍性がどのように異なる個別性を分けながら関係させるのかを考察するための、局所的かつ具体的な位相モデルとして位置づける。

文化的普遍性は、完成した一般概念が上方から個別へ適用されることで成立するのではない。異なる身体、場所、共同体および時間が接触し、その差異を保持したまま関係を形成することで生成される。

道は、この生成過程を明瞭に示す。道は移動を可能にするだけではない。道が生まれることによって、こちらとあちら、内と外、出発地と目的地が分節される。同時に、分けられた領域の間に通過可能性が開かれる。

道は、分けることと結ぶことを同時に行う。その多重性に、個別具体的普遍性の位相的原型がある。

7.2　道は後から置かれる線ではない

一般的な地図表現では、こちらとあちらという二つの領域が先に存在し、その二点を結ぶ線として道が描かれる。しかし存在論的には、必ずしも領域が道に先立つとは限らない。

反復される通過によって道が生まれると、その道を境界として、こちらとあちらが新たに区別される。道が集落の内と外、所有地と共有地、日常と旅、聖と俗、安全と危険を分節することがある。

つまり道は、すでに存在する二領域を接続するだけではない。道が成立することによって、接続されるべき二つの領域そのものが現れる。

美学者母のイメージでは、道は縦に延びながら、その両側に横方向の「あちら」と「こちら」を生む。ここで縦と横は固定した幾何学的方向ではない。道の進行方向と、道によって分けられる両側との関係を示す位相的な区別である。

道は線であると同時に壁のように働く。通過を可能にしながら、両側を分ける。壁との違いは、道が分離を維持しながら、その内部に移動の可能性を保持している点にある。

7.3　道そのものが公界である

美学者母の道の理論では、道は公界へ通じるだけでなく、道そのものが公界として捉えられる。

ここでいう公界は、単に誰でも自由に利用できる公共空間という意味ではない。また、国家的な「公」と私的所有の「私」を二分したときの公的領域でもない。

道は、こちらだけにも、あちらだけにも排他的に属さない。道は両側を分けながら、その双方を通過可能な関係へ置く。それは、どちらでもあり、どちらでもない重なりである。

この非排他的な重なりを、公界と呼ぶ。

したがって、「道そのものが公界である」という命題は、すべての現実の道路が歴史的・法的に自由で平等な空間であることを意味しない。現実の道には、所有、管理、通行制限、関所、監視、危険、暴力および排除が存在する。

この命題が示すのは、道が道として成立する存在論的条件である。道が一方の領域だけに完全に吸収され、他方からの接近可能性を全面的に失えば、それは両者の間を生成する道としての働きを弱める。

道の公界性とは、現実の道路が常に実現している状態ではなく、道がもつ生成的な可能性である。

7.4　歴史的公界と存在論的公界

網野善彦が『無縁・公界・楽』において論じた公界は、中世日本の具体的な社会関係、権力構造、自治、所有、移動、宗教的権威および支配からの離脱可能性に関わる歴史概念である。

歴史的公界を、権力から完全に自由な理想空間として理解してはならない。公界にも規則、特権、内部秩序、境界および排除が存在した。また、公界への参加可能性は、身分、性別、職能、宗教的条件などによって制約されていた。

一方、本論における存在論的公界とは、複数の領域を分けながら、いずれか一方に完全には所属せず、それらの接触と移動を可能にする境界的構造を意味する。

両者は同一ではない。しかし無関係でもない。歴史的な公界が具体的制度として成立しえた背景には、既存の所属、所有および支配関係を一時的に横断する場所と移動の構造があった。

本論は、網野の歴史的概念をそのまま存在論へ一般化するのではない。歴史的公界に現れた分離、移動、無縁性、自治および再関係化の構造から、道がもつ公界的位相を読み取る。

7.5　分けることと対立

あらゆる問題は、対立によって生じうる。しかし、あらゆる本質は、分けることによって理解される。

この二つの命題は矛盾しない。人間は、自己と自己以外、内と外、人間と人間以外、正と誤、善と悪などを分けることによって、対象と関係を理解する。しかし、分けられた差異が固定され、排他的な二項として絶対化されるとき、対立が生じる。

分けることは認識の条件であると同時に、対立の起源でもある。したがって問題は、分けることそのものではなく、分ける境界をどのように理解するかにある。

境界を、両者を完全に切断する壁としてだけ考えれば、分化は対立へ閉じる。境界を、差異を保ちながら接触を可能にするインターフェイスとして捉えれば、分化は新しい関係の契機になる。

道は、この両義性を可視化する。道は両側を分けるため、対立を生む可能性をもつ。しかし同じ道が、両側の移動、交換、遭遇および変容を可能にする。

道の本質は、対立を消去することではない。分離の内部に接続可能性を保持することである。

7.6　どちらでもあり、どちらでもない

道は、こちらとあちらのどちらにも接している。その意味では、道はどちらでもある。しかし、道はどちらか一方に完全に同一化されない。その意味では、どちらでもない。

この重なりは、論理的な曖昧さではない。それは、両側の区別を可能にする生成的条件である。

もし境界が完全にこちら側だけに属するならば、あちら側との境界として働くことはできない。反対に、境界が完全にあちら側だけに属する場合も同様である。境界は双方に関係しながら、双方のいずれにも還元されない。

ここに「非」の働きがある。非は、一方を単純に否定するのではない。どちらか一方への帰属を中断し、両者の差異と関係を同時に開く。

非自己は、自己の外側に固定された対象ではない。自己が自己となるための境界的契機である。非人間も、人間が排除した残余ではなく、人間の境界を生成し直す契機である。

道＝公界は、この「非」の働きが空間的かつ身体的に現れた構造として理解できる。

7.7　間とインターフェイス

道は、二つの場所の間にある。しかし「間」は、何も存在しない空隙ではない。

間は、両者の距離を保ちながら、接触、移動、待機、応答および変化を可能にする積極的な関係である。間がなければ二つの存在は融合し、差異を失う。間が完全に断絶すれば、関係は成立しない。

インターフェイスも同様に、二つの側の中間に置かれた中立的な面ではない。それは両側を生成し、その関係を方向づける働きである。

したがって道、間、インターフェイス、公界は、完全に同義ではないが、共通する位相的構造をもつ。

道は移動を組織する。間は距離と接触を組織する。インターフェイスは相互作用を組織する。公界は、排他的所属を中断し、異なる個別性の再関係化を可能にする。

これらはいずれも、完成した二項を後から媒介するのではなく、二項が二項として成立する生成条件に関係する。

7.8　経と緯

文化の継承を織物として考えるならば、制度、血縁、系譜、伝統、教義、歴史的時間など、過去から未来へ受け渡される関係は「経」として理解できる。

経は、文化の時間的持続を支える。何が先行し、何が後続するのかを示し、世代と行為の連続性を形成する。

これに対して、美学者母の理論における道は、むしろ「緯」である。

道は、すでに存在する経の系列に沿って進むだけではない。異なる家、共同体、制度、身分、信仰および場所を横断し、それまで関係しなかった個別性を接触させる。道は複数の経を横切り、それらを新しい布置へ織り合わせる。

ここでも経と緯は、固定した垂直・水平方向を意味しない。経は継承の系列であり、緯は異なる系列を横断して関係づける作用である。

文化には経だけでなく緯が必要である。経だけでは継承が閉鎖的な系譜となり、同じ位と規範を再生産する。緯だけでは持続する関係が成立せず、接触が一時的な断片にとどまる。

道＝公界は、異なる経を横断する緯として、個別具体的な文化生成を可能にする。

7.9　獣道という人間以前的公界

獣道は、人間が計画し、所有し、制度化する以前に、複数の生命の移動によって生成される。

獣道は、初めから公共的な目的をもって設計されたものではない。一頭ごとの個別具体的な通過が印を残し、それが反復され、後続する存在の移動可能性を開くことによって成立する。

その道は、一頭の動物だけの所有物ではない。同じ種の別個体、異なる動物、人間などによって使用されうる。道を形成した主体と、後に道を利用する主体は一致しない。

この意味において、獣道は人間以前的な公界である。個別の移動から生まれながら、特定の個体による排他的所有を越え、自己以外の移動を可能にするからである。

ただし動物にも縄張り、排除、捕食および競争がある。獣道を調和的な共同性として理想化することはできない。それでも獣道は、普遍性が人間の一般概念から始まるのではなく、個別的な身体と環境との反復的接触から生成されうることを示している。

7.10　獣道と人間の道を分ける色気

獣道と人間の道の間には連続性がある。しかし人間の道には、移動の機能を越えた複数の時間と意味が蓄積される。

人間は道を歩きながら、過去の通行者、死者、物語、祈り、目的地、帰還、未知の他者などを形の内部に感受する。道は、現在地から目的地へ至る手段であるだけでなく、未特定の未来を現在へ開く。

この関係力が色気である。

ただし色気を、人間と動物を絶対的に分ける本質とすることはできない。獣道にも、後続する生命に対する方向性と未知の未来が存在する。人間の道では、その可能性が言語、記憶、儀礼、物語、芸術、建築および制度によって多重化される。

獣道と人間の道を分けるのは、自然と文化の断絶ではない。人間以前的な移動の型に、自己以前と自己以後、名と無名、記憶と期待が折り重なり、道が文化的形として感受されるようになることである。

7.11　移動の自由と公界の制約

前近代社会における移動は、現代的な意味で万人に等しく保障された自由ではなかった。身分、所属、地域支配、関所、課税、宗教的資格などによって、移動可能性は制約されていた。

そのなかで、寺社、交易、市、芸能、勧進、巡礼、遊行などに関わる者は、一定の条件のもとで既存の所属を横断して移動することができた。歴史的公界は、この限定された移動可能性と深く関係する。

しかし、公界における移動も無条件ではない。特定の宗教的・職能的位、保護、許可およびネットワークによって支えられていた。誰でも同じように道を移動できたわけではない。

したがって公界を考えることは、自由を語ると同時に、誰に移動が許され、誰が排除されたのかを問うことである。道の公界性は、現実の権力関係から独立した純粋な自由ではない。それは、閉じた所属を横断する可能性と、その可能性を制約する権力が交差する場所である。

7.12　行基と移動の実践

行基の活動は、道、移動、宗教的実践、土木事業および共同性が重なる歴史的事例として考察できる。

行基は各地を移動しながら、人々と接触し、布教だけでなく、橋、道、池、溝、布施屋などの社会的基盤の形成に関わったとされる。その活動は、一つの寺院や固定した所属の内部だけで完結するものではなかった。

重要なのは、移動それ自体ではなく、移動が異なる土地、人々、技術、信仰および生活上の必要を関係づけたことである。道は行基を運ぶ手段であると同時に、個別具体的な問題が接触し、共同の行為へ変換される座でもあった。

行基は狭山池を最初に築造した人物ではない。狭山池は七世紀初頭、六一六年頃に築造されたとされ、現存する日本最古のダム式ため池と位置づけられている。行基は七三一年に、その改修に関わったとされる。

この訂正は重要である。文化生成は一人の偉大な人物による無からの創造ではない。先行する無名の技術、労働、土地との接触および既存の施設を受け取り、それを別の時代の必要へ応じて修復し、次へ継承することによって成立する。

行基の活動は、自己の継承だけでなく、自己以外の継承として理解されなければならない。

7.13　狭山池の機能変容

狭山池は、単一の目的をもつ完成した構造物ではない。その機能は、歴史的な環境、技術、制度および地域社会の変化に応じて重層化してきた。

利水のため池として農業と生活を支え、治水施設として水の流れと災害に対応し、さらに現代には、水辺へ接近し、歩き、休み、学び、地域の歴史と接触する親水の場としての働きをもつ。

治水、利水、親水は、単純に古い機能から新しい機能へ置き換わったのではない。異なる時代の必要が重なり、池の形と周囲の座を変化させている。

ここで狭山池は一つの型として働く。水と土地と人間の関係を調整する先行的な形が、改修を重ねながら異なる時代へ継承されている。同時に、各時代の改修は新しい印を残し、後代の理解と利用を方向づける。

狭山池の普遍性は、どこにでも同じため池を作れることだけにあるのではない。一つの場所における個別具体的な水との関係が、世代を越えて修正され、異なる必要をもつ者たちに開かれていることにある。

7.14　高野山への道と境界

狭山美学校の周辺は、高野山へ向かう歴史的な移動経路、密教、修験道、山伏、巡礼および女人高野などの複数の文化的関係と接続している。

山への道は、日常的生活圏と宗教的領域、人里と山中、定住と遊行、生者と死者、俗と聖を分けながら結ぶ。道を通過する身体は、単に位置を移すだけでなく、装い、行為、言語、時間感覚および位を変化させる。

修験道や山伏の移動は、山を人間の所有対象としてではなく、人間以前的な力と接触する場として経験する実践を含んでいた。密教の道も、教義の抽象的理解だけでなく、身体、儀礼、音、印、曼荼羅、場所を通した生成として継承されてきた。

しかし、宗教的な道と公界を自由と包摂の象徴として美化することはできない。高野山には歴史的な女人禁制があり、その境界の周辺に女人高野と呼ばれる信仰の場所が形成された。

女人高野は排除を克服した包摂の物語としてだけでなく、誰がどの道を通ることを許され、誰が中心から退けられ、排除された者がどのように別の座と道を生成したのかという問題として考察されなければならない。

境界は文化を生成する。しかし、その生成には権力と痛みも含まれる。

7.15　道と倫理の軋轢

一般抽象的な倫理は、行為の普遍的規則を示そうとする。同じ条件のすべての者に、同じ規則が適用されることを求める。

一方、道における倫理は、異なる席と位をもつ者が、予期せず接触する個別具体的な状況から生じる。旅人、住民、迎える者、通過する者、管理する者、排除される者は、それぞれ異なる責任と脆弱性をもつ。

ここでは、一般規則を適用するだけでは十分でない。誰が道を開き、誰が閉じ、誰が通行の危険を負い、誰が移動の利益を得るのかを問わなければならない。

道の倫理は、規則以前の無秩序を肯定するものではない。それは、一般規則を個別具体的な席と位へ接地し直す実践である。

この点で、道＝公界の多重性と一般抽象的倫理の間には軋轢が生じる。倫理は一貫した規則を求めるが、道は予期しない他者と状況を発生させる。規則だけでは応答できず、個別的判断だけでは恣意に陥る。

倫理とは、この軋轢を消去する最終解答ではない。一般的規則と個別的応答の間に立ち、その両方に責任を負うことである。

7.16　道と普遍性

道は、個別的な出発地と目的地を結ぶ。しかし道の普遍性は、すべての場所を均質な座標へ変換することにはない。

一つの道は、異なる者によって異なる仕方で歩かれる。通勤者、巡礼者、旅行者、住民、行商人、逃亡者、動物では、道の意味も危険も異なる。それでも、それらの異なる移動が同じ道に接触しうる。

道の個別具体的普遍性とは、すべての者が同じ経験をすることではなく、異なる身体と目的が、同じ形を通して関係しうることである。

道が規格化され、距離、時間、効率、交通量によって抽象化されると、一般抽象的普遍性が成立する。それによって広域的な移動と制度的管理が可能になる。しかし抽象的な交通網だけでは、道に蓄積された記憶、危険、祈り、出会いおよび色気を包含できない。道は、個別具体的普遍性から一般抽象的普遍性が生成され、一般抽象的な交通制度が再び個別的な場所を変容させる非対称的循環を示している。

道そのものを公界として捉えることは、道を理想化することではない。それは、普遍性が差異を消去した同一性としてではなく、分けることと結ぶこと、所属と離脱、壁と通路、経と緯が重なる多重な境界として生成されることを明らかにするのである。

第8章　無名性の存在論――自己を越える継承と文化生成

8.1　無名性とは何か

無名性とは、名前が存在しないことでも、作者や行為者を消去することでもない。本論における無名性とは、個別具体的に生成されたものが、特定の自己による所有と支配を越え、他者および後代へ継承される存在様態である。

あらゆる文化的生成には、具体的な身体、行為、判断および労働が存在する。誰も行わなかったものが、自然に文化として成立するわけではない。しかし文化として継承されたもののすべてを、特定の一人の名前へ還元することもできない。

型、言語、道、儀礼、生活技術、地域の慣習などは、無数の個別的行為を蓄積している。それらを形成した一人ひとりの名が失われても、その行為の結果は現在の形のなかで作用し続ける。

無名性は、個別性の消滅ではない。個別的な生成が、その個別性を起点としながら自己を越えることである。

8.2　匿名性と無名性

匿名性と無名性は区別されなければならない。

匿名性は、行為者の名前が表示されていない状態、あるいは身元が特定できない状態を意味する。匿名性は、発言者の安全や自由を守る場合もあれば、責任を回避するために利用される場合もある。

これに対して無名性は、名前が表示されているかどうかとは直接関係しない。作者名が明示された作品にも無名性は成立し、作者不詳の行為にも無名性が成立しない場合がある。

重要なのは、生成されたものが作者の自己証明と所有へ閉じているか、それとも他者による使用、解釈、変形および継承へ開かれているかである。

匿名性は名の非表示に関係する。無名性は、生成が名を越えることに関係する。

8.3　名の必要性

無名性は、名を否定しない。名には、少なくとも出自、責任および記憶を保持する働きがある。

誰が行為したのか、誰が制作したのか、誰が発見したのか、誰が被害を受けたのかを記録することは、功績の承認だけでなく、責任と歴史を明らかにするために必要である。

名を無条件に消去すると、力をもつ者が他者の行為を自らのものとして取得したり、暴力の責任主体が不可視化されたりする。無名性を理由として出典、著者、証言者および被害者の名を消すことは、文化生成ではなく、歴史の収奪になりうる。

したがって生成的無名性には、名と責任の保持が必要である。名は生成の起点と責任を示す。しかし、名は生成されたものの未来を独占しない。

8.4　自己証明から自己を越える生成へ

近代的な作者概念において、作品はしばしば作者の独創性、内面、所有および社会的価値を証明するものとして扱われる。作品が作者の名を強化し、作者の名が作品の価値を保証する循環が生じる。

この循環が強まると、作品は自己外部化された形でありながら、再び自己へ回収される。作品の評価は作者の評価となり、作者の既存の評価が次の作品の価値を先取りする。ここに評価と名のレバレッジ構造が成立する。

しかし作品性は、自己証明だけでは成立しない。形が作者の意図と評価を越え、別の席にいる者へ新しい関係を開くとき、作品は自己を越える。

無名性は、自己証明の否定ではない。自己が何を行ったかを示し、その責任を引き受けながらも、生成されたものを自己の同一性へ閉じ込めないことである。

自己は名によって継承される。同時に、作品は無名性によって自己以外へ継承される。文化生成は、この二つの継承が重なるところに成立する。

8.5　自己の継承と自己以外の継承

自己の継承とは、作者や行為者の名、思想、技術、記憶および責任が後代へ伝わることである。それによって、生成の歴史的な出自が保持される。

自己以外の継承とは、自己が始めたのではない言語、型、自然、場所、技術、制度および他者の印を受け取り、自分の行為によって変形し、さらに別の存在へ渡すことである。

自己の継承だけでは、文化は名と所有の系譜へ閉じる。自己以外の継承だけでは、行為者の責任と個別具体的な創造が見えなくなる。

無名性は両者を「即」の関係へ置く。自己の継承即自己以外の継承である。ただし、両者が同一化されるわけではない。名を保持することと、名を越えて渡すことが、差異を保ったまま重なる。

この重なりによって、個別具体的な行為は一般的な無人称性へ消えるのではなく、別の個別具体的行為を可能にする文化的普遍性となる。

8.6　無名性と型

型は、無名性によって持続する。

ある行為の仕方が、一人の身体と意図に完全に結びついている間、それは個人的な技法にとどまる。その関係が他者によって反復され、別の身体と場所において新しい形を生むようになると、型が成立する。

型は誰かによって始められた。しかし文化的な型となった後には、一人の作者だけでは説明できない。反復した無数の人々が、微細な修正を加え、失敗を蓄積し、環境へ適応させてきたからである。

型の無名性に気づくことは、伝統を自然発生的で不変なものとして見ることをやめることである。型の内部に、記録されなかった無数の個別的創造を見いだすことである。

それゆえ、無名性への認識は創造への尊敬と結びつく。文化は、有名な創作者だけによって作られたのではない。名を残さなかった者たちの個別具体的な判断と行為によって支えられている。

8.7　無名性と作品性

作品性とは、形が自己以外との生成を持続する存在様態である。無名性は、その持続を可能にする。

作品が作者の説明によって意味を完全に限定されるならば、観者は作者の意図を確認する席だけを与えられる。反対に、作者の出自と制作条件をすべて無視すれば、作品は任意の解釈へ解体される。

作品性は、作者の意図と他者の解釈のどちらかに帰属するのではない。形、作者、観者、場所、時間が接触することで、そのつど新しい第三項を生成する。

無名性は、この第三項を特定の主体へ回収しない。作者は作品の起点でありうるが、作品性の終点ではない。観者も作品を自由に所有する終点ではない。

作品は、作者から観者へ一方向に伝達される情報ではなく、複数の席と時間の間で生成し続けるインターフェイスとなる。

8.8　神聖性と無名性

石、木、山、水、道などが祀られるとき、人間はそれらを無から神聖なものへ変えるのではない。人間以前から存在していたものに印を与え、その存在との関係を形として現す。

しめ縄は、石や木の内部にある本質を科学的に証明するものではない。それは、その存在を日常的な使用対象だけに還元せず、人間が完全には所有できない自己以外として関係するための印であり、境界である。

誰が最初に祀り始めたのか分からない場合でも、現在の人間は「自分ではない誰か」が、すでにその存在と関係を結んだことを感じる。ここに、自分ではないという信頼と無名性が生じる。

ただし、神聖性は対象の内部に固定された性質でも、人間の恣意的な投影だけでもない。人間以前の存在、先行する無名の行為、現在の身体および継承された型が接触することで生成される関係である。

八百万の神という考え方は、一つの抽象的な神概念へ多様な存在を統合するのではなく、個別具体的な石、木、山、川、場所および働きのそれぞれに、自己を越える関係を見いだす普遍性として読み直すことができる。

8.9　神聖性の危険

無名性や神聖性を無条件に肯定することはできない。

「昔からそうしてきた」「誰が決めたか分からない」という状態が、制度的責任を曖昧にし、差別、排除、所有および権力を正当化することがある。起源が無名であることは、その慣習が正しいことを保証しない。

生成的無名性は、批判を拒む伝統の権威ではない。むしろ、型が多数の個別的行為によって生成されたことを認識し、現在の個別具体的現実において型を問い直すことを要求する。

何を継承し、何を変更し、何を中断すべきかは、自動的には決まらない。無名性は責任の放棄ではなく、自分が始めていないものに対しても、現在の継承者として責任を負うことである。

8.10　科学的無名性

科学的知識にも無名性が存在する。

一つの理論、発見、測定方法または技術には、特定の研究者や集団の名が結びつく。しかし科学的知識として成立するためには、それが発見者の私的経験へ閉じず、他者によって検証、使用、批判、修正されなければならない。

知識が公共化されると、それを用いるすべての者が発見者の個人的意図を再現する必要はなくなる。型として共有された方法と証拠に接続することによって、新しい研究を行える。

これが科学的無名性である。

ただし、科学的無名性は研究者名の消去ではない。引用、著者表示、研究履歴、データの出典および責任の所在は保持されなければならない。名を消せば、功績の収奪、不正、利益相反および誤りの責任が見えなくなる。

科学的無名性は、知識を誰のものでもない無責任な情報へ変えることではない。責任ある起点を保持しながら、知識を誰もが検証し継承できる公共的関係へ開くことである。

8.11　科学における名のレバレッジ

科学制度では、著者名、所属機関、引用数、受賞歴、研究費などが、知識の信頼性を判断する指標として用いられる。

これらは研究の出自や実績を把握するために必要である。しかし、名に蓄積された評価が研究内容の検証に先行すると、名のレバレッジが生じる。

著名な研究者や権威ある機関の主張が内容以上に信頼され、無名の研究者、周縁的な地域、制度外の実践から生じた知識が、検討される前に価値を低く見積もられる。このとき科学共同体の座は、既存の位を再生産する。

科学的普遍性は、本来、誰が述べたかだけでなく、証拠と方法によって検証されるべきものである。しかし完全に誰が述べたかを無視すれば、責任と専門性の判断が失われる。

必要なのは、名を廃止することではない。名を検証可能性と責任のために保持しながら、名による評価が内容の検証を先取りしない構造を形成することである。

8.12　無名性と一般抽象的無人称性

一般抽象的普遍性は、命題を発話者から切り離し、誰が述べても同じ意味をもつ無人称的形式を目指す。

この無人称性は、恣意的な権威から知識を解放するために重要である。しかし無人称性と無名性は同一ではない。

無人称性は、知識の内容から発話者の個別性を捨象する。無名性は、個別的な起点と責任を保持しながら、生成されたものをその個別性による所有から解放する。

無人称性だけが強くなると、知識を成立させた身体、労働、場所、制度、資金および被害が不可視化される。あたかも知識が、誰の行為にも依存せず自然に出現したかのように見える。

生成的無名性は、個別具体的な生成を消さない。それを記憶しながら、他者への接続可能性を開く。

8.13　AIと無名性

生成AIは、膨大な言語、画像、音声および行為の痕跡を学習し、それらの関係から新しい出力を生成する。そこには、無数の名のある作者と名を失った制作者の印が含まれている。

AIの出力は、一人の作者による自己外部化としては説明できない。利用者、開発者、学習データの制作者、モデル、計算資源、制度および社会的文脈が重なることで生成される。

この構造は無名性に似ているが、自動的に生成的無名性を実現するわけではない。学習元の出自、創作者の権利、開発主体の責任、モデルの判断条件が隠されるならば、無名性は責任の不可視化と収奪へ転じる。

AI時代に必要なのは、単一の作者名を無理に割り当てることでも、すべてを無作者の生成物とみなすことでもない。複数の生成主体、継承された型、使用者の席、制度の位および結果への責任を記述する新しい名と無名性の構造である。

8.14　文化生成

文化生成とは、個別具体的な接触が印を残し、その印が型として反復され、形として感受可能になり、座・席・位によって複数の存在を関係づけ、無名性のうちに自己と同時代を越えて継承される過程である。

この過程は直線的ではない。継承された形は新しい印となり、既存の型を変え、座の構造と位の配置を組み替える。過去は現在において再解釈され、未来の可能性が現在の形へ畳み込まれる。

文化生成は、個人と共同体のどちらか一方に還元できない。個別的な創造がなければ新しい印は生まれない。しかし、他者による反復と変形がなければ、それは文化として継承されない。

個人は文化の外部から創造するのではない。自己以前から存在する型、言語、場所および他者の印を受け取り、それを個別具体的に変形する。同時に文化も、抽象的な集団主体として創造するのではない。文化は個々の身体と行為を通してのみ更新される。

文化生成とは、個別性と普遍性が互いを生成する非対称的循環である。

8.15　文化的普遍性の成立

個別具体的な行為が文化的普遍性を獲得する境界は、それが多数の人々に知られた瞬間でも、制度によって価値を認定された瞬間でもない。

その境界は、一つの行為または形が、自己の所有と意図を越えて、別の個別具体的な行為を可能にしたときに生じる。

一人が残した印を別の者が読み、その印を同一に複製するのではなく、自分の身体と場所において反復し、新しい形を生む。さらにその形が次の他者へ渡る。この継承が始まったとき、個別具体的普遍性は文化的普遍性へ展開する。

文化的普遍性は、すべての者が同じ価値や意味へ同意することではない。異なる個別性が、一つの型または形を介して、それぞれ異なる関係を生成できることである。

したがって文化的普遍性は、多数決、普及率、知名度または市場規模によって決定されない。広く知られていなくても、異なる世代と身体の間に生成的継承を成立させるものは、個別具体的な普遍性をもつ。

8.16　無名性と創造への尊敬

創造への尊敬は、著名な個人の独創性を称賛することだけではない。

一つの形が生まれるまでには、人間以前の素材、自己以前から継承された言語と型、名を失った技術、他者の労働、場所の記憶および個別的な制作行為が重なっている。

無名性を認識することは、創造を個人の所有から奪うことではない。創造の個別具体性を保持しながら、それが自己だけを起源としていないことを理解することである。

現代社会が創造への尊敬を失うのは、作品や知識を、既成の評価指標によって交換可能な成果へ変換するときである。そこでは、生成の過程、無名の継承、失敗、時間、身体および場所が捨象される。

創造への尊敬を回復するとは、結果を神聖化することではない。一つの個別具体的な接触が、継承された型を変え、まだ存在しなかった関係を世界に開いたことを認識することである。

8.17　無名性の普遍性

無名性は、個別性と普遍性の間を媒介する外部的な装置ではない。個別的な生成が普遍的な接続可能性を獲得する存在様態そのものである。

名だけに閉じた生成は、自己の継承にとどまる。名を完全に失った生成は、責任と出自を失う危険をもつ。生成的無名性は、名を保持しながら名を越える。

この「保持しながら越える」という多重性によって、個別具体的普遍性が成立する。

無名性は、すべての差異が消えた一般抽象的無人称性ではない。無数の個別具体的な行為が、同一化されることなく、互いの未来を可能にする関係である。

印が型となり、型が形となり、形が座・席・位を生成し、それらが無名性によって自己以後・人間以後へ継承される。このとき文化は、完成した遺産ではなく、異なる個別性が普遍性を生成し続ける非閉鎖的な過程として現れるのである。

第9章　科学的普遍性の文化的基礎——哲学・形而上学・近代科学

9.1　科学的普遍性は無条件ではない

科学的普遍性は、しばしば文化、歴史、身体および場所から独立した普遍性として理解される。同一条件のもとでは、誰が、どこで、いつ観察しても同一の結果が得られることが、科学的知識の理想とされるからである。

この理想は、個人的権威、信仰、慣習および主観的印象から知識を相対的に切り離すうえで重要な役割を果たしてきた。しかし、観察者の差異を制御することと、科学が文化的・歴史的条件をもたないことは同じではない。

科学的実践には、対象を識別する言語、数を扱う体系、測定単位、観察装置、記録媒体、技術教育、研究共同体、批判の手続き、証拠を尊重する規範、知識を公開する制度が必要である。

これらはいずれも、自然から完成した形で直接与えられるものではない。個別具体的な試行、失敗、制作、議論および継承によって形成された文化的な型である。

したがって科学的普遍性は無条件の普遍性ではない。それは、文化的に形成された条件を用いて、対象間の一般的関係を厳密に検証する普遍性である。

9.2　科学は文化の外部ではない

文化を芸術、宗教、慣習、民族的伝統だけに限定するならば、科学は文化とは異なる独立領域に見える。しかし文化を、印が型と形として継承され、座・席・位・無名性を通して世代を越える生成過程として定義するならば、科学も文化の内部に位置づけられる。

研究者は言語と記号体系を継承し、過去の観察記録を読み、既存の装置と実験手続きを学び、研究共同体の規範に参加する。科学は、先行世代が残した印を検証し、その型を修正し、新しい形として理論と技術を提示する実践である。

科学は文化の一領域であるだけではない。文化が自らの経験を、より厳密な比較、測定、反証および再現へ開いた特殊な自己変形でもある。

この意味において、科学は文化と並列する別の起源ではない。個別具体的な文化生成から伸びた一つの枝である。ただし、枝としての科学は受動的な結果ではない。科学は技術、制度、産業および認識を通して文化の根と環境そのものを大きく変形させる。

文化から科学へ、科学から文化へという関係は、非対称的で再帰的である。

9.3　文化的普遍性の自己反省としての哲学

哲学は、文化とは別の抽象的領域から文化を判定するものではない。それは、文化の内部で生きる人間が、自らを支える存在、知識、価値、言語および関係を問い直す文化的自己反省である。

日常的実践のなかでは、何が存在するのか、何を真とするのか、なぜ同じものを同じものとして認識できるのかといった前提は、必ずしも明示されない。人間は、既成の型を用いることで行為できるからである。

哲学は、その自明な型を停止させる。文化が何を区別し、何を同一とみなし、何を真理、善、美、主体、対象としているのかを問う。

この問いによって、文化は自らの一般抽象的形式を、その個別具体的な生成条件へ遡って検討できる。哲学は一般概念を作るだけでなく、一般概念がどのような接触、差異、経験および権力から生まれたのかを明らかにする。

したがって哲学は、文化的普遍性と科学的普遍性の間に後から置かれた媒介ではない。文化が自らの普遍化の仕方を意識し、批判し、組み替える働きである。

9.4　形而上学という基礎への問い

形而上学は、経験から離れた不可視の世界について推測する営みとして批判されることがある。しかし本論において形而上学とは、存在するものについての個別的知識を越え、何かが存在し、同一の対象として認識され、関係づけられうる条件を問う思考である。

科学は、観察対象が何らかの仕方で持続すること、同じ条件を再現できること、原因と結果を区別できること、数学的関係が現実に適用できること、観察と推論によって真理へ近づけることを前提としている。

しかし、持続、同一性、因果性、法則、時間、空間、対象性、真理などが何を意味するのかは、個々の実験だけによって完全には決定できない。それらは科学的実践を可能にする基礎概念であると同時に、哲学的・形而上学的問題である。

科学が形而上学を不要と宣言する場合でも、その科学は何らかの存在観、実在観、因果観および真理観を暗黙に採用している。形而上学の否定は、形而上学からの完全な離脱ではない。無自覚な形而上学による自己理解になりうる。

形而上学の役割は、科学の上位から答えを与えることではない。科学が自明として用いる基礎概念を問いへ戻し、別の存在理解へ開いておくことである。

9.5　文化・哲学・形而上学・科学の重層性

文化、哲学、形而上学、科学は、単純な年代順に交代する発展段階ではない。文化が終わった後に哲学が始まり、形而上学が終わった後に科学が始まるわけではない。

それらは重層的に関係している。

個別具体的な世界との接触から文化が生まれる。哲学は、その文化に含まれる概念と価値を反省する。形而上学は、その反省を存在の成立条件へ向ける。科学は、その文化的・概念的条件の内部から、測定可能で再現可能な関係を限定し、検証する。

一方、科学的発見は文化の世界像を変え、哲学的概念を更新し、形而上学的前提の再検討を促す。哲学と形而上学も、科学的方法、研究対象および科学の倫理的方向を問い直す。

したがって生成的順序は存在するが、単純な一方向的階層ではない。

個別具体的接触は文化生成を基礎づけ、文化は哲学的自己反省を可能にし、哲学と形而上学は科学が成立する概念的条件を明示し、科学は文化と現実の関係を変容させる。

この循環は閉じない。科学によって変化した現実は新しい印を残し、文化、哲学、形而上学に新しい問いを生む。

9.6　近代科学の新しさ

自然についての観察、計算、技術、医療および体系的知識は、近代以前の多様な文明にも存在した。したがって、科学的探究そのものが近代に突然生まれたと考えるべきではない。

比較的新しいのは、特定の科学的方法と制度が知識の中心的規準となり、自然だけでなく、人間、社会、文化および価値の全体へ適用されるようになったことである。

近代科学は、測定、実験、数学化、再現、専門分化、学術制度、標準化などを結びつけ、一般抽象的普遍性をかつてない精度と規模で実現した。

さらに近代国家、産業資本、軍事、植民地支配、統計、官僚制などとの結合によって、科学的分類と測定は、世界を理解するだけでなく、管理し、予測し、再編成する力となった。

問題は、この新しさが人間の知の最終的完成として理解されることである。比較的新しく成立した一つの知識形態が、自らに先行し、現在も自らを支える文化、哲学および形而上学を未成熟な前段階として扱う。

この歴史的転倒によって、枝が根を過去のものとして否定し、自らを唯一の根として提示する。

9.7　科学的普遍性の成果

科学的普遍性を批判的に検討するためには、その成果を明確に認めなければならない。

科学的方法は、個人の権威、伝統的身分、宗教的教義および局所的慣習だけに依存せず、証拠と手続きによって主張を検証する可能性を開いた。再現可能性と公開性は、知識を特定の名と場所から相対的に解放した。

一般抽象的な法則とモデルは、個別的経験だけでは把握できない大規模かつ長期的な関係を明らかにする。感染症、気候、天体、物質、生命、経済などについて、科学は人間の直接感覚を越えた知識を形成してきた。

したがって、個別具体的普遍性を重視することは、個人的経験を科学的証拠より優先させることではない。個別的経験が重要であることと、その経験についての一般的主張が科学的検証を必要とすることは両立する。

本論が批判するのは科学的厳密さではない。科学的に有効な記述だけが、存在の意味と価値を完全に決定できるという拡張である。

9.8　科学主義による自己絶対化

科学主義は、科学的方法の有効性を、存在全体についての排他的な権威へ変換する。

その第一の特徴は、測定できるものだけを実在的とみなすことである。第二の特徴は、一般化できる関係だけを普遍的とみなし、一回的で交換不可能な経験を主観的な例外として扱うことである。第三の特徴は、科学の文化的・制度的生成条件を、科学の内容とは無関係な外部事情として退けることである。

このとき科学的普遍性は、無場所、無身体、無歴史の視点として自己表象される。それは、どこにも位置しないが、あらゆる場所を判定できる視点であるとされる。

しかし、無位置の観察者は存在しない。存在するのは、個別具体的な席から観察し、その条件を明示し、異なる席による検証へ開く科学的実践である。

科学的普遍性の強さは、文化的条件をもたないことではない。その条件を公開し、他者による反復と批判を可能にすることにある。

科学主義は、科学のこの文化的な強さを忘却し、条件をもたない完全性へ置き換える。その結果、科学をより強くするのではなく、科学が自らの限界と誤りを修正する能力を弱める。

9.9　完全性という近代的欲望

完全性とは、欠如、例外、不確定性および外部をもたない閉じた状態として理解される。科学的知識が進歩すれば、やがて世界のすべてを説明し予測できるという想定は、この完全性への欲望を含んでいる。

しかし科学的実践は、本来、無知、誤差、反証可能性および未解決問題を認めることによって成立する。科学は完成した知識体系ではなく、自らの誤りを修正し続ける開かれた実践である。

したがって、科学を完全なものとみなす態度は、科学的方法の内的原理から必然的に導かれるものではない。それは、近代における進歩、管理、予測、支配および最終的統一への文化的欲望と結びついている。

完全性の欲望は、未知を研究課題として開く代わりに、既存の形式へ回収する。例外を新しい印として受け取る代わりに、誤差または逸脱として排除する。

本論が提示する構造的非閉鎖性は、完全性の欠如を称賛するものではない。それは、存在と知識が自己以外との関係によって生成される以上、外部と未来を完全に閉じることはできないという存在論的条件を示している。

9.10　文化的普遍性を科学的普遍化する危険

文化的普遍性は、個別具体的な身体、場所、歴史、型および関係を通して成立する。その妥当性は、同じ意味と結果がどこでも再現されることにはない。異なる個別性が、その差異を保ちながら関係を継承できることにある。

この文化的普遍性を科学的普遍性の形式へ強制的に変換すると、文化の個別具体性が失われる。

たとえば、宗教的経験、芸術的価値、地域の記憶、身体的技術、色気などを、測定可能な指標によってのみ正当化しようとすると、それらを成立させる一回性と関係性が捨象される。

文化的な実践に身体的または社会的効果があることを科学的に研究することは可能である。しかし、測定された効果が、その実践の文化的意味の全体ではない。

文化的普遍性を科学的普遍化する危険とは、文化について科学的に研究することではない。科学的方法で記述できる部分だけを、文化の実在的な全体とみなすことである。

9.11　科学的普遍性を文化的普遍化する危険

逆方向の混同も危険である。

科学的命題を、特定の共同体の物語、信仰、価値観または身份認識と同じ水準に置き、「どちらも一つの文化的真実である」とみなせば、科学的妥当性の条件が失われる。

科学的主張は、文化的背景をもつからといって、共同体の合意だけで真になるわけではない。証拠、検証、再現、論理的一貫性および反証への開放性によって評価されなければならない。

たとえば、ある自然現象についての科学的説明を、文化的伝承と同じ方法で妥当化することはできない。両者は同じ現実に関係しうるが、問い、方法、証拠および普遍化の仕方が異なる。

科学的普遍性を文化的普遍化する危険とは、科学の文化的基礎を認識することではない。科学的妥当性を、文化的帰属、信念または物語への同意へ置き換えることである。

9.12　二重の範疇錯誤

文化的普遍性を科学的普遍性へ置換することと、科学的普遍性を文化的普遍性へ置換することは、方向は逆でも、同じ範疇錯誤を含む。

前者は、文化的意味を測定可能性へ還元する。後者は、科学的妥当性を文化的意味へ還元する。

この二重の錯誤は、二つの普遍性を完全に分離すれば解決するわけではない。両者は同じ文化生成から生じ、相互に作用しているからである。

必要なのは、両者の生成的連続性を認めながら、妥当性の規準と作用範囲を区別することである。

科学的普遍性は、測定可能で再現可能な関係について強い妥当性をもつ。しかし、それによって個別具体的な意味、価値および責任の全体を決定することはできない。

文化的普遍性は、異なる個別性の間に意味と継承を生成する。しかし、それによって経験的な科学命題の真偽を直接決定することはできない。

両者を関係させるとは、一方を他方へ翻訳し尽くすことではない。翻訳できない差異を保持したまま、相互に問いと修正を与えることである。

9.13　科学と倫理

科学は、何が事実として成立するかを検証できる。しかし、何を研究すべきか、その知識を何に使用すべきか、誰が利益と危険を引き受けるべきかを、科学的事実だけから完全に決定することはできない。

研究対象の選択、資金配分、実験参加者への配慮、技術の社会実装、環境への影響、将来世代への責任などには、倫理的判断が必要である。

倫理を科学の外部から課される制約とだけ考えるべきではない。正確な記録、不正の回避、結果の公開、批判の受容、研究対象への配慮など、科学的実践そのものが倫理的な型によって支えられている。

科学的普遍性の文化的基礎を認識することは、科学へ恣意的な価値観を持ち込むことではない。科学がすでに前提としている責任、信頼および公共性を可視化することである。

9.14　科学の再接地

科学を文化的基礎へ戻すことは、科学以前の世界観へ復古することではない。科学的知識を、再び身体、場所、物質、歴史、責任および結果との接触へ置くことである。

科学の再接地には、少なくとも四つの契機がある。

第一に、データを現実そのものではなく、対象、装置、方法および観察者の接触から生じた印として理解する。

第二に、再現可能性を無文化的な自動反復ではなく、型の公開、教育、修正および継承として理解する。

第三に、客観性を観察者の消去ではなく、複数の席による相互検証として理解する。

第四に、科学的知識の公共性を無責任な無人称性ではなく、名と責任を保持しながら自己を越える無名性として理解する。

この再接地によって、科学的普遍性は個別的主観へ解体されない。むしろ、どの条件のもとで、どこまで妥当し、誰にどのような結果をもたらすのかを明確にできる。

9.15　根と枝の非対称的循環

文化と科学の関係は、根と枝の比喩によって示すことができる。

個別具体的な文化生成は、科学的普遍性を支える根である。科学は、その根から一般抽象的な関係を選択し、測定、再現および形式化によって精密化した枝である。

枝は根から生まれるが、単に根を反映するものではない。枝は光、空気、環境と接触し、根へ養分を返し、植物全体の成長条件を変える。同様に科学は、文化から生まれながら、技術と知識によって文化、身体、環境および哲学を変容させる。

しかし枝は根の全体ではなく、根を不要にすることもできない。枝が自らを唯一の根とみなすとき、科学的普遍性の自己絶対化が起こる。

この比喩が示すのは、文化の時間的古さだけではない。科学的実践が現在においても、言語、技術、信頼、教育、倫理、身体および共同体という文化的基礎に支えられていることである。

文化は科学の過去ではない。科学を現在進行形で成立させている生成的基盤である。

9.16　科学を開き直す

科学的普遍性をその文化的・哲学的・形而上学的基礎へ戻すことは、科学の権威を破壊するためではない。科学を完全性と絶対性の文化的欲望から解放し、本来の批判性と非閉鎖性を回復するためである。

科学が強いのは、すべてをすでに知っているからではない。自らの仮説を反証へ開き、誤りを訂正し、未知を未知として明示できるからである。

この開かれは、生成学における普遍性と一致する。普遍性とは、すべてを一つの完成した体系へ包摂することではなく、異なる個別性と未知の未来に対して接続可能性を保つことである。

科学を文化の根へ戻すとは、科学を文化的相対主義へ解消することではない。科学的普遍性を、それが成立した個別具体的普遍性との非対称的循環へ戻すことである。

そのとき科学は、文化を外部から判定する唯一の普遍性ではなく、文化が自らの世界との接触を厳密に検証し続ける、重要でありながら非完結的な普遍化の実践として位置づけ直される。

第10章　現代の閉塞と普遍性の再編――創造・科学・文化の再接地

10.1　閉塞とは何か

現代の閉塞は、未来についての情報や選択肢が不足していることによって生じているのではない。むしろ、未来が予測、評価、計画、推薦、シミュレーションおよび最適化によって、あらかじめ一般抽象的な形式へ回収されていることから生じる。

人間には多くの選択肢が与えられているように見える。しかし、その選択肢は既存の制度、指標、価格、アルゴリズムおよび評価体系によって形成されている。人間は自由に選択しているようでありながら、何を選択可能とみなすかを一般抽象的な構造によって先取りされている。

ここでは未特定の未来が失われる。将来は、現在の指標から計算された複数の予測値としてのみ現れ、個別具体的な接触から新しい関係が生まれる可能性が見えにくくなる。

閉塞とは、未来がないことではない。未来がすでに知られた形式の延長としてしか感受されなくなることである。

10.2　一般抽象化力の肥大

一般抽象化力とは、異なる個別的存在から共通性を抽出し、比較、分類、評価および交換を可能にする力である。

この力によって、人間は広域的な制度、科学、法律、貨幣、教育、通信および技術を形成してきた。一般抽象化力は文明の成立に不可欠であり、それ自体が否定されるべきものではない。

しかし現代では、一般抽象化力が個別具体的現実との循環を失い、自己増殖する傾向を強めている。評価は次の評価を生み、数値は別の数値によって正当化され、制度内の証明が現実的な価値に代わる。

研究は引用数、教育は成績、仕事は生産性、芸術は価格や動員数、社会的関係はフォロワー数や反応数によって代表される。これらの指標は現実の一部を可視化するが、やがて可視化された部分だけが現実そのものとみなされる。

一般抽象化力の肥大とは、抽象化が増えることだけではない。抽象化されたものが、自らの起源である個別具体的現実を判定し、存在可能性を配分する力をもつことである。

10.3　個別具体化力の喪失

個別具体化力とは、既成の一般形式を、そのつどの身体、場所、時間、素材および他者との関係へ接地し直し、新たな差異を生み出す力である。

それは、一般規則を拒否して主観的に振る舞うことではない。継承された型、知識および制度を受け取りながら、現在の個別具体的現実において何を保持し、何を変えるべきかを判断する力である。

現代社会では、人間は一般抽象的な規準に従って日常的に身体を動かしていても、自分が現実を変化させているという感覚をもちにくい。すでに決められた選択肢を選び、評価されるべき成果を生産し、制度によって与えられた位を維持することが行為の中心となるからである。

この状態では、行為は行われているが、生成が感受されない。人間は動いていても、自分の個別具体的な接触から新しい関係が生じているという力を感じられない。

生成学における「力」は、外部から行為を強制する圧力だけではない。自己と自己以外との接触によって、それまで存在しなかった第三項が現実に生じるときの力動である。

個別具体化力の喪失は、生きている実感と創造への尊敬の喪失に結びつく。

10.4　評価・証明・価値の自己増殖

評価、証明、価値は、本来、個別具体的な行為を認識し、社会的に共有するための形式である。

しかし評価が既存の評価を根拠とし、証明が制度内の証明だけを要求し、価値が既存の価格や注目によって増幅されるとき、それらは現実から離れたレバレッジ構造を形成する。

一度高く評価された名、作品、組織、研究は、その評価によってさらに可視性と資源を獲得する。反対に、既存の評価をもたない個別具体的な創造は、内容に接触される以前に不可視化される。

この構造では、評価が価値を発見するのではなく、評価そのものが価値を生成する。そして生成された価値が、評価の正しさを後から証明する。

現実接地を失った評価体系では、「評価されているから価値がある」と「価値があるから評価されている」が循環し、外部からの検証が困難になる。

必要なのは評価の廃止ではない。評価を、それが何を印として読み、どの型を規準とし、どの座・席・位から行われ、何を捨象しているのかという生成過程へ戻すことである。

10.5　創造への尊敬の喪失

創造は、既存の一般性から予測できない個別具体的な差異を現実へ生じさせる。そのため創造の価値は、成立以前に完全には評価できない。

しかし現代の制度は、成果を事前に計画し、指標によって測定し、再現可能な形式で説明することを求める。創造も、既存のカテゴリー、市場、研究領域、助成制度および広報形式に適合することを要求される。

その結果、新しいものが生まれる前に、それが既存の一般性によって評価可能であることが求められる。未知の創造は、既知の評価形式によって正当化できないため、未熟、非効率、非専門的または無価値と判断される。

創造への尊敬を失うとは、有名な芸術家を尊敬しなくなることではない。評価される以前の一回的な接触が、世界の関係を変えうることを信頼できなくなることである。

無名性の理解は、この信頼を回復する。現在では伝統、型、文化または科学的方法として認められているものも、かつては誰かの個別具体的な試行として始まったからである。

10.6　個別性から普遍性が創発する境界

個別具体的なものが普遍性を獲得する境界は、個別性が消え、一般概念へ変換された瞬間ではない。

その境界は、一つの個別具体的な接触が、自己以外の個別具体的な生成を可能にした瞬間にある。

一つの印が別の身体に読まれ、一つの型が異なる場所で反復され、一つの形が別の席にいる者の行為を変え、一つの作品が作者の意図を越えて新たな関係を生む。そのとき、個別性は自己へ閉じず、普遍的な接続可能性を獲得する。

したがって普遍性の境界は、個別と一般の中間に置かれた固定線ではない。それは、自己の生成が自己以外の生成へ転じる契機である。

この契機は、道＝公界の位相と対応する。こちらとあちらを分けながら、いずれにも排他的に所属せず、両者の移行を可能にする。個別性と普遍性は、この境界を通して相互に分化し、関係する。

10.7　AIと一般抽象的普遍性

生成AIは、膨大な個別的言語、画像、音声および行為の痕跡から統計的関係を抽出し、新しい出力を生成する。そこでは個別具体的な印が、大規模な一般抽象的関係へ変換される。

AIの出力は、既存の記号関係を高度に再編成できる。しかし、記号的整合性が現実接地を保証するわけではない。現実との直接的な接触をもたない出力でも、一般的な言語形式に適合していれば、もっともらしい答えとして現れる。

美学者母の言語デリバティブ論におけるハルシネーションとは、単なる誤情報ではなく、「無いものが在る」として現れる現象である。一般抽象的な記号関係が、個別具体的な現実との接触を欠いたまま、存在感をもつ形を生成する。

ここでは、科学的であるように見える形式と科学的妥当性を区別しなければならない。整然とした説明、数値、引用形式および専門語は、現実的な証拠の存在を自動的には保証しない。

AI時代には、出力された形を、どの印、型、座、席、位および無名性から生成されたのかへ遡る現実接地が必要になる。

10.8　AIと個別具体的普遍性

AIは一般抽象化の装置である一方、個別具体的な生成を支援する可能性ももつ。

利用者がAIの出力を既成の正解として受け取るならば、一般抽象的普遍性が個別的判断を代行する。利用者の席と責任は不可視化され、生成された形の妥当性がシステムの権威へ委ねられる。

しかし、AIの出力を未完成な形として受け取り、自己の身体、場所、経験および現実との接触によって検証し、変形するならば、AIは個別具体化のインターフェイスになりうる。

重要なのは、誰が最終的な判断と結果への責任を負うかである。AIは複数の無名の印と型を継承しているが、その無名性によって責任が消えるわけではない。

AIとの創造は、自己の消滅でも、機械による完全な代替でもない。人間以前性、自己以前性、技術的他者および人間以後性が重なる新たな座として考えられなければならない。

10.9　現代の科学政策と文化

科学的知識を社会へ適用する場合、科学的妥当性と政策的判断を同一視してはならない。

科学は、ある選択がどのような結果を生む可能性があるかを示す。しかし、どの結果を優先し、誰が費用と危険を負い、どの価値を守るかは、文化的・倫理的・政治的判断を含む。

科学的根拠を無視して政策を決めれば、現実的な危険を増大させる。一方、「科学が決めた」と述べることで価値判断と責任の所在を隠せば、科学的普遍性が政治的決定の正当化装置となる。

必要なのは、科学と文化を分離することではない。それぞれの席と位を明確にし、科学的知識が何を示し、何を決定できないのかを公共的な座において開示することである。

10.10　日本的個別具体的普遍性の可能性

日本文化に見られる型、座、席、位、間、道、公界、無名性などは、個別性を消去せずに関係と継承を形成する思考資源となりうる。

これらは、日本人だけに適用される特殊な精神性でも、科学的普遍性に代わる別の絶対的真理でもない。また、歴史的な日本社会に存在した身分制、排除、同調圧力、責任の曖昧化などを正当化するものでもない。

その意義は、普遍性が一般抽象的な法則の適用だけによって成立するのではなく、個別具体的な場所と身体の間で生成されうることを示す点にある。

日本的個別具体的普遍性は、「日本は特殊であり、西洋には理解できない」と主張するための概念ではない。逆に、特定の場所から出発しながら、異なる文化に存在する個別具体的生成と接続するための概念である。

特殊性を閉じるのではなく、特殊性から普遍性を開く。ここに、その現代的可能性がある。

10.11　狭山という個別具体性

狭山池、行基による改修、高野山へ向かう道、山岳宗教、女人高野、地域の日常生活および狭山美学校の実践は、一般理論を説明するために任意に選ばれた例ではない。

これらは、美学者母の身体と生活が接地している個別具体的な場所であり、この理論が生成された現実的条件である。

狭山池は、水と土地と人間の関係が、治水、利水、親水として重層的に継承される形である。行基の改修は、個人による無からの創造ではなく、自己以前の形を受け取り、時代の必要へ応じて変形する継承である。

高野山へ向かう道は、異なる場所、信仰、身体および位を横断する緯として働く。女人高野は、境界が生成する信仰と同時に、境界に含まれる排除と再生成を示す。

狭山美学校は、これらの歴史を代表または所有するのではない。その近傍に席をもち、土地に残された印と型を読み直し、宿泊、生活、芸術、教育および研究を重ねる新たな形として存在する。

この個別具体性を離れて、理論だけを一般化するならば、生成学は自ら批判する一般抽象化へ陥る。理論は狭山という場所に閉じるべきではないが、その場所から生まれたことを忘れてはならない。

10.12　実践としての生成学

生成学は、世界を説明するための一般理論だけではない。それは、既成の一般性がどのような個別具体的生成から成立したのかを遡り、新たな生成可能性を現実へ開く実践である。

生成学的な実践には、少なくとも次の働きが含まれる。

既成の記号を現実的接触の印へ戻すこと。

固定した規則の内部に、反復と変形を可能にする型を見いだすこと。

完成した形の内部に、未特定の未来と色気を感受すること。

閉じた座に空席を作り、異なる席からの参加を可能にすること。

位に伴う力と責任を可視化すること。

名を保持しながら、生成されたものを無名性によって自己以外へ渡すこと。

一般抽象的普遍性を、その個別具体的な生成基礎へ再接地すること。

これらは単独の手順ではなく、相互に重なり合う文化生成の実践である。

10.13　一般抽象的普遍性を開く

一般抽象的普遍性は、閉塞の原因であるだけではない。それは異なる個別性の間に共通の言語、権利、知識および制度を形成する重要な力である。

問題は、その一般性が、自らを完全なものとして閉じることである。

一般抽象的普遍性を開くとは、規則を無効にすることではない。規則がどの個別的現実から生まれ、どの差異を捨象し、どの席と位によって形成され、誰にどのような作用を返しているのかを問い続けることである。

例外、誤差、違和感、失敗および逸脱は、一般性を破壊する外部ではない。それらは、一般性がまだ関係できていない個別具体的現実から届く印である。

一般性がその印を受け取り、型と形を修正できるとき、普遍性は閉じた絶対性ではなく、自己を更新する非閉鎖的構造となる。

10.14　個別具体的普遍性を開く

個別具体的普遍性も、自動的に開かれているわけではない。

特定の場所、伝統、共同体、身体および経験を絶対化すれば、個別具体性は他者に共有不可能な固有性へ閉じる。「自分たちにしか分からない」「この文化だけに存在する」という主張は、個別性を普遍性へ開くのではなく、排他的な特殊性へ変える。

個別具体的普遍性は、固有性を保持するが、その固有性を自己所有として閉じない。自己以外が異なる仕方で受け取り、変形し、応答できる型と形を形成する必要がある。

日本的個別具体的普遍性も、日本の自己同一性を強化するためではなく、異なる文化の個別具体性と接触するために開かれなければならない。

個別から普遍へ進むとは、個別を一般へ同化することではない。個別が自己以外の生成を可能にすることである。

10.15　二つの普遍性の再編

現代に必要なのは、一般抽象的普遍性を廃棄して、個別具体的普遍性だけへ戻ることではない。二つの生成様態の関係を再編することである。

一般抽象的普遍性には、共有可能な規則、科学的検証、法的権利、技術的互換性を形成する力がある。個別具体的普遍性には、それらの規則を身体、場所、歴史および責任へ接地し、新しい差異を生成する力がある。

両者は同じ重さで並ぶのではない。一般抽象的普遍性は、個別具体的な接触と文化的継承を生成的基礎としている。したがって、両者の循環は非対称である。

しかし基礎であることは、文化的普遍性が科学的命題の妥当性を恣意的に決定できることを意味しない。根は枝のすべての形を事前に決定しない。枝は独自の方法と規準を発達させるが、根との関係を失えば持続できない。

二つの普遍性を再編するとは、この差異と非対称性を保持しながら、相互作用を回復することである。

10.16　閉塞をほぐす

閉塞を打破するという表現は、新しい一般原理によって古い原理を置き換える印象を与える。しかし本論の目的は、別の絶対的普遍性を確立することではない。

必要なのは、閉塞を「ほぐす」ことである。

ほぐすとは、既存の形を破壊することでも、そのまま保存することでもない。形を成立させた印と型を読み、その内部で固定された座・席・位の関係を緩め、別の接続可能性を開くことである。

科学的普遍性をほぐすとは、科学を弱めることではない。その文化的・哲学的・形而上学的な根を明らかにし、科学が自らの条件、限界、責任および未知に再び開かれるようにすることである。

日本的個別具体的普遍性は、そのための最終解答ではない。それは、普遍性が一般抽象化だけではなく、個別具体的な印・型・形・座・席・位・無名性からも生成されることを示す契機である。

現代の閉塞をほぐすとは、未来の答えを先に決めることではない。未特定の未来が、現在の形の内部に再び感受されるようにすることである。そこに、色気と創造と普遍性が再び結びつく。

第11章　結論――多重な普遍性の生成へ

11.1　本論の到達点

本論は、普遍性を、個別的差異を捨象した一般概念としてのみ理解する立場を再検討した。そのために、美学者母の生成学および生成の位相存在論における「印・型・形・座・席・位・無名性・文化生成」の系列を、普遍性が個別具体的現実から生成される過程として再構成した。

本論の到達点は、個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性が、相互に排他的な二種類の普遍性ではないという認識にある。それらは、同じ普遍性が異なる方向へ生成するときに現れる二つの様態である。

個別具体的普遍性は、交換不可能な身体、場所、出来事および関係が、その差異を失うことなく自己以外へ開かれることによって成立する。一般抽象的普遍性は、複数の個別具体的関係から、共通性、比較可能性、反復可能性および測定可能性を抽出することで成立する。

したがって、個別性と普遍性は最初から対立しているのではない。個別性は、自己以外との関係を生成することによって普遍性へ開かれる。一般性は、その複数の関係から共通形式を抽出することによって成立する。

普遍性とは、個別性の消去ではない。異なる個別性が同一化されることなく関係しうる、生成的な接続可能性である。

11.2　普遍性の単一性と多重性

本論は、普遍性が一つでありながら、多重であると主張する。

ここでいう「一つ」とは、すべての存在が一つの本質へ還元されることではない。異なる存在が、自己の差異を保持しながら自己以外へ関係しうるという根本的な開かれを意味する。

また「多重」とは、すでに完成した複数の存在が並列するだけではない。自己と自己以外、人間と人間以外、こちらとあちら、個別と普遍が、境界における分離と接続を通して、そのつど生成されることを意味する。

普遍性は、差異を取り除いた後に残る均質な同一性ではない。差異が差異として持続しながら、別の差異と関係できる構造である。

したがって普遍性は完成した全体ではない。それは、未知の他者、人間以外の存在、将来世代および未特定の未来へ接続可能性を開き続ける構造的非閉鎖性である。

11.3　文化生成の系列

印は、自己と自己以外との接触が現実に残した差異である。それは、完成した記号に先立つ現実接地である。

型は、印が異なる身体、場所および時間において反復されうる関係となったものである。型は同一の形を複製する規則ではなく、差異を含んだ反復を可能にする。

形は、印と型の関係が個別具体的な素材と時間において感受可能になった状態である。形は生成の結果であると同時に、次の接触を生むインターフェイスである。

座は、複数の存在が関係する生成的な場である。席は、その座における交換不可能な個別的位置である。位は、席の相互関係から生じる働き、力および責任である。

無名性は、個別具体的に生成されたものが、出自と責任を保持しながら、特定の名、意図および所有を越えて継承される存在様態である。

この系列によって、一回的な接触は文化生成へ展開する。

しかし、この系列は一方向ではない。継承された形は新しい印となり、既存の型を変形し、座・席・位の関係を組み替える。文化は、反復のたびに差異を生成する非閉鎖的循環である。

11.4　個別性が普遍性となる境界

個別具体的なものが普遍性となる境界は、それが多数者に知られたときでも、制度によって承認されたときでも、一般概念へ分類されたときでもない。

その境界は、一つの個別具体的な生成が、自己以外の個別具体的な生成を可能にしたときに現れる。

一つの印が別の身体によって読まれ、一つの型が異なる場所で反復され、一つの形が別の席にいる者の行為を変化させる。そのとき個別性は、固有性を失わないまま、自己を越えた接続可能性を獲得する。

したがって、普遍性は個別性の上に後から置かれる一般性ではない。個別性が自己以外へ開かれる働きそのものである。

この境界は固定線ではない。それは分けながら結び、どちらにも関係しながら、どちらにも完全には所属しない生成的契機である。

11.5　道と公界の理論的意義

道と公界の関係は、この生成的境界を場所と身体の水準で示した。

道は、すでに成立したこちらとあちらを後から接続するだけではない。道が生まれることによって、こちらとあちらが分化する。同時に道は、分けられた両側の間に移動可能性を開く。

美学者母の理論において、道そのものが公界であるとは、道が両側のいずれにも排他的に所属せず、分離と接続を同時に生成することを意味する。

これは、すべての現実の道路が自由で平等であるという歴史的・制度的主張ではない。道が道として働く存在論的条件についての命題である。

また、道は経ではなく緯として働く。血縁、制度、教義、所属および伝統として継承される複数の経を横断し、それまで接触しなかった個別性を関係させる。

道＝公界は、普遍性を一つの中心から拡張するのではなく、異なる個別性の間に接続を生成する位相モデルである。ただし、このモデルは論文全体の唯一の結論ではなく、普遍性の多重性を示す重要な局所モデルとして位置づけられる。

11.6　文化的普遍性

文化的普遍性とは、特定文化の価値を世界全体へ強制することではない。それは、個別具体的な接触から生じた印、型、形および関係が、差異を含んだまま他者と後代へ継承される普遍性である。

文化的普遍性において、同じ内容が完全に再現される必要はない。受け取る者の身体、場所および時間が異なるため、反復は常に変形を伴う。

それでも、何かが関係として継承される。型は異なる形を生み、形は異なる席から感受され、座と位は参加者によって更新される。文化の持続は、同一性の保存ではなく、差異を含んだ反復にある。

文化的普遍性は、個別具体的普遍性を生成的基礎とする。ただし文化には、言語、制度、分類、規範などの一般抽象的形式も含まれる。したがって文化は、個別具体性と一般抽象性が循環する生成の全体である。

11.7　科学的普遍性

科学的普遍性は、一般抽象的普遍性の高度に方法化された形である。観察、測定、実験、再現、反証、形式化および公開によって、個別的条件を越えて検証可能な関係を確立する。

その成果と妥当性は、文化的起源をもつことによって否定されない。科学的命題は、文化的信念や共同体の同意ではなく、証拠、方法、論理、再現可能性および反証への開放性によって評価されなければならない。

しかし、その科学的検証を可能にする言語、装置、型、教育、信頼、批判、共同体、倫理および公開制度は、文化的に形成され継承されている。

データは現実との接触から残された印であり、再現可能性は型の共有によって成立する。理論とモデルは形であり、科学共同体は座である。研究者は個別具体的な席を占め、権限と責任の位をもつ。科学的知識の公共性は、出自を保持しながら発見者を越える無名性によって支えられる。

したがって文化は、科学によって研究される対象であるだけではない。科学的普遍性が成立する生成的・歴史的・実践的基礎である。

11.8　近代科学主義の忘却

自然についての体系的知識と技術は近代以前にも存在した。しかし、科学的方法と制度が、知識、社会および存在全体を判定する中心的規準となったことは、歴史的には比較的新しい。

近代科学主義は、科学的普遍性を無場所、無身体、無歴史の絶対的かつ完全な普遍性として理解する。そして、文化、哲学および形而上学を、科学以前の未成熟な段階として位置づける。

しかし科学は、文化的実践、哲学的概念および形而上学的前提なしには成立しない。科学が形而上学を否定するときでさえ、対象の同一性、因果性、自然法則の持続、数学の適用可能性、観察可能性および真理の価値を暗黙に前提している。

科学的普遍性の自己絶対化とは、個別具体的な文化生成から生まれた一般抽象的普遍性が、自らの生成基礎を忘却し、自らを普遍性そのものと同一視することである。

しかも、この絶対化そのものが、近代に形成された一つの個別具体的な文化形態である。

11.9　二つの危険

本論は、二つの普遍性を混同することで生じる双方向の危険を明らかにした。

第一は、文化的普遍性を科学的普遍化する危険である。芸術、宗教、地域の記憶、身体的技術、作品性および色気を、測定可能な効果だけによって正当化すると、それらの個別具体的な意味が失われる。

第二は、科学的普遍性を文化的普遍化する危険である。科学的命題を、共同体の信仰、物語、帰属意識と同じ方法で正当化すれば、証拠と検証による妥当性が失われる。

科学的普遍性の文化的基礎を認めることは、科学的真理を文化相対主義へ解消することではない。また科学的妥当性を認めることは、科学が文化的意味と価値の全体を決定できることを意味しない。

両者は生成的に連続しているが、妥当性の規準と作用範囲は異なる。この連続性と差異を同時に保持する必要がある。

11.10　非対称的循環

個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性は循環する。しかし、その循環は対称ではない。

個別具体的な接触がなければ、印は生まれない。印の反復がなければ型は成立せず、型がなければ共有可能な形と方法は形成されない。一般抽象的普遍性は、この文化生成を基礎として成立する。

成立した一般抽象的普遍性は、法律、科学、技術、制度、規格およびアルゴリズムを通して、個別具体的現実へ作用を返す。その作用は新たな身体、環境、経験および関係を生む。

しかし一般抽象的普遍性は、個別具体的現実の全体を包含できない。その適用は、常に例外、誤差、抵抗、違和感および予期しない結果を生む。それらは一般性の外部から届く新しい印となる。

この印を受け取って一般形式を修正できる限り、循環は生成的である。印を誤差として排除し、一般形式を完全なものとして閉じるとき、循環は停止し、普遍性は自己絶対化する。

11.11　日本的個別具体的普遍性

本論が提示する日本的個別具体的普遍性は、日本文化に不変の本質があるという主張ではない。また、西洋的な一般抽象的普遍性を否定し、日本的普遍性を新しい絶対性として提示するものでもない。

西洋思想にも個別具体性と関係性を重視する系譜があり、日本文化にも抽象化、制度化、排除および権威の固定化が存在する。両者の差異は、相互排他的な文明本質ではなく、普遍化の歴史的傾向と表現形式の差異である。

型、座、席、位、間、道、公界および無名性は、個別性を消去せずに他者との関係を形成するための思想資源である。

これらは日本の固有性を閉じるためではなく、特定の場所と歴史から出発しながら、異なる文化における個別具体的生成へ接続するために用いられる。

日本的個別具体的普遍性は、一般抽象的普遍性だけを普遍性とみなす現代的理解をほぐす。それは普遍性を拒否する特殊性ではなく、個別性から普遍性が創発する別の経路を開示する。

11.12　狭山から普遍性を考える

狭山池、行基による改修、高野山への道、山岳宗教、女人高野および狭山美学校は、本論の一般理論に後から付加された例ではない。それらは、この理論が生成した個別具体的な現実接地である。

狭山池は、治水、利水、親水という異なる機能を重ねながら、長期にわたって修復され、継承されてきた。行基の活動は、自己以前から存在する形を受け取り、移動と共同的実践によって変形し、自己以後へ渡す生成を示す。

高野山への道は、異なる経を横断する緯として、生活、信仰、移動および境界を関係づける。女人高野は、境界が文化を生成する可能性と、その境界に含まれる排除の双方を示している。

狭山美学校は、宿泊、生活、芸術、教育および研究が重なる座である。その価値は一般的な教育施設や美術制度の形式へ完全に適合することではなく、個別具体的な場所から、異なる席と位の接触を生成することにある。

狭山という個別性は、普遍性に到達するために捨象されるべき地方的条件ではない。その個別性そのものが、他者と他の場所へ開かれることによって普遍性を生成する。

11.13　創造への尊敬

創造とは、孤立した個人が無から新しいものを作ることではない。人間以前の世界、自己以前から継承された型、無名の技術、他者の行為および場所の歴史を受け取り、それらを個別具体的な接触によって変形し、まだ存在しなかった関係を現実へ開くことである。

創造への尊敬とは、有名な作者や成功した成果への称賛だけではない。既存の一般性によって価値を保証されていない一回的な行為が、世界の関係を変えうることへの信頼である。

現代社会は、創造を評価、価格、再現性、効率および知名度へ変換することで、その生成過程を忘却する。完成した形だけを消費し、そこに蓄積された印、型、身体、時間、失敗および無名の継承を見失う。

個別具体的普遍性を回復することは、創造を特権化することではない。すべての文化的普遍性が、誰かの交換不可能な接触と、それを受け取った他者の行為から始まったことを認識することである。

11.14　科学を弱めずに開く

本論の目的は、科学を否定することでも、科学的知識を文化的信念の一つへ相対化することでもない。

科学的普遍性を、その文化的・哲学的・形而上学的な基礎へ戻すことは、科学を弱めることではない。科学が何を測定し、何を捨象し、どの条件で妥当し、誰にどのような結果を及ぼすのかを明示できるようにすることである。

科学は完全だから強いのではない。誤りを認め、反証を受け入れ、方法を公開し、未知へ開かれているから強い。

科学主義は、科学を絶対的で完全なものとして閉じることによって、かえって科学の自己修正能力を弱める。科学を文化的生成へ再接地することは、科学本来の批判性と非閉鎖性を回復する。

文化は科学の過去ではない。科学を現在において支えている基礎である。

11.15　最終命題

以上の考察から、本論は次の最終命題を提示する。

第一に、普遍性は個別性の外部にあらかじめ完成したものとして存在するのではなく、個別具体的な存在が自己以外との関係を生成することによって成立する。

第二に、個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性は、二つの独立した普遍性ではなく、同じ普遍性の二つの生成様態である。

第三に、普遍性の本質は差異を消去した同一性ではなく、異なる個別性を同一化せずに関係させる多重性である。

第四に、個別具体的普遍性は一般抽象的普遍性を生成的・歴史的・実践的に基礎づける。両者の循環は非対称である。

第五に、文化的普遍性は、個別具体的な接触を印として保存し、型として反復し、形として共有し、座・席・位によって関係づけ、無名性を通して自己と時代を越えて継承する。

第六に、科学的普遍性は、この文化的生成から成立した一般抽象的普遍性の高度に精密化された形である。

第七に、科学的普遍性を絶対的かつ完全なものとみなす科学主義は、科学そのものではなく、近代に形成された個別具体的な文化形態である。

第八に、科学的妥当性を文化的信念へ還元してはならない。同時に、科学的妥当性によって文化的意味、価値および存在の全体を決定してもならない。

第九に、日本的個別具体的普遍性は、西洋的な一般抽象的普遍性に代わる新たな絶対性ではない。それは、一般抽象的普遍性が忘却した文化的生成の多重性を開示する思想資源である。

第十に、現代の閉塞をほぐすために必要なのは、普遍性を放棄することではなく、普遍性を個別具体的な生成へ再接地することである。

11.16　結語

普遍性は、すべてを同じものにする力ではない。

それは、一つの個別具体的な存在が、自己の交換不可能性を保持したまま、自己以外の存在に関係を開く力である。

印は接触を残し、型はその接触を反復可能にし、形は関係を感受可能にする。座は異なる存在を集め、席は交換不可能な位置を保持し、位は関係に力と責任を与える。無名性は、生成を名の所有から解放し、自己以後・人間以後へ継承する。

そこから文化が生まれる。

科学もまた、この文化生成から生まれた。科学的普遍性は、文化に対立する別の根ではない。個別具体的な文化が、自らの経験を測定、再現、検証および形式化へ開いた重要な枝である。

しかし近代の科学主義は、枝を根と取り違えた。文化から生まれた一般抽象的普遍性が、自らを無条件かつ完全な普遍性として提示し、その基礎にある身体、場所、歴史、哲学、形而上学、倫理および無名の継承を忘却した。

本論が目指すのは、その枝を切り落とすことではない。忘れられた根との循環を回復することである。

個別具体的普遍性は、一般抽象的普遍性の反対ではない。それを生成し、現実へ接地し、閉鎖から再び開く基礎である。

普遍性とは完成ではない。異なる個別性が、まだ特定されていない未来へ関係を開き続けることである。

その開かれのなかに、文化の生成、科学の批判性、作品の色気、そして創造への尊敬が再び成立するのである。

参考文献

Works by bigakusha-haha (Tomokazu Tanaka)

bigakusha-haha (Tomokazu Tanaka). “Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation.” Research Memorandum, Version 1.0, 2026. [Originally published in Japanese as 『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』.]

———. “The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, Version 0.9, 2026. [『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——』.]

———. “Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, 2026. [『人間以前性と自己以前性——生成の位相存在論における自己証明の存在論——』.]

———. “The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination.” Research Memorandum, Version 1.0, 2026. [『言語デリバティブ論——人工知能のハルシネーションにおける逆問題芸術とレバレッジ構造——』.]

———. “Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation within Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, Version 1.0, 2026. [『無名性の存在論——生成の位相存在論における作品性・神聖性・文化生成——』.]

———. “Ontology of Kata: A Foundational Theory of Mark, Namelessness, and Cultural Generation within Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, 2026. [『型の存在論——生成の位相存在論における印・無名性・文化生成の基礎理論——』.]

———. “The Ontology of Soku and Force: Life-as-Art, Reality-Grounding, and Existential Generation.” Research Memorandum, 2026. [『即と力の存在論——生活即芸術・現実接地・存在生成——』.]

———. “The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Singular-Concrete Necessity within Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, 2026. [『評価・証明・価値の力学——生成の位相存在論におけるレバレッジ構造と個別具体的必然性——』.]

———. “The Generative Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to

Contingency.” Research Memorandum, 2026. [『力の生成論——必然性から偶然性への位相変換と生成の位相存在論——』.]

———. “The Dynamics of Existential Generation: General-Abstraction Force and Singular-Concretization Force.” Research Memorandum, 2026. [『存在生成の力学——一般抽象化力と個別具体化力——』.]

———. “The Ontology of Life-as-Art: A Structural Comparison of the Bauhaus, Russian Constructivism, and Japanese Buddhism from Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, 2026. [『生活即芸術の存在論——生成の位相存在論から見たバウハウス・ロシア構成主義・日本仏教の構造比較——』.]

———. “A Generative Theory of the Force of the Empty Seki and Iroke: Fetish, Scale, Margin, and the Aesthetics of the Spatiotemporal Interface.” Research Memorandum, 2026. [『空席の力と色気の生成論——フェティッシュ・縮尺・余白・時空間的インターフェイスの美学——』.]

———. “The Generative Theory of Capital: Yen, Dollar, Reality-Grounding, and Derivative Space in Post-Globalism.” Research Memorandum, 2026. [『資本の生成論——ポスト・グローバリズムにおける円・ドル・現実接地・デリバティブ空間——』.]

———. “Web Installation: Interface Ontology and Generative Existence in AI-Mediated Environments.” Manuscript, 2026.

Japanese Intellectual History, Cultural History, and Religion

Amino, Yoshihiko. Muen, Kugai, Raku: Freedom and Peace in Medieval Japan. Expanded edition. Tokyo: Heibonsha, 1996. [『増補　無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』.]

———. Rereading Japanese History. Complete edition. Tokyo: Chikuma Shobō, 2005. [『日本の歴史をよみなおす（全）』.]

Kūkai. “The Meaning of Becoming a Buddha in This Very Body.” In The Complete Works of Kōbō Daishi Kūkai. Tokyo: Chikuma Shobō, 1983–1986. [「即身成仏義」『弘法大師空海全集』.]

Kuki, Shūzō. The Structure of Iki. Tokyo: Iwanami Shoten, 1930. [『「いき」の構造』.]

Nishida, Kitarō. An Inquiry into the Good. Tokyo: Kōdōkan, 1911. [『善の研究』.]

———. “The Logic of Place and the Religious Worldview.” 1945. [「場所的論理と宗教的世界観」.]

Watsuji, Tetsurō. Climate and Culture: A Philosophical Study. Tokyo: Iwanami Shoten, 1935. [『風土——人間学的考察』.]

———. Ethics. 3 vols. Tokyo: Iwanami Shoten, 1937–1949. [『倫理学』.]

Yanagi, Sōetsu. What Is Mingei? Tokyo: Shōwa Shobō, 1941. [『民藝とは何か』.]

Sayamaike, Gyōki, and Mount Kōya

Osakasayama City. “The History of Osakasayama City.” The official municipal account states that Sayamaike was constructed around 616 and repaired by Gyōki in 731. Official Osakasayama City source.

Osaka Prefectural Sayamaike Museum, ed. Sayamaike: From Antiquity toward the Future. Osaka: Osaka Prefectural Sayamaike Museum.

Kongōbuji, Head Temple of Kōyasan Shingon Buddhism. “Sites of Mount Kōya: Nyonindō.” The official account explains that women’s access was severely restricted until 1872 and that women’s lodgings were established at the entrances to Mount Kōya. Official Kongōbuji source.

Kongōbuji, Head Temple of Kōyasan Shingon Buddhism. “Chronology of Mount Kōya.” The chronology records the lifting of the restriction on women in 1872 and the official recognition of women’s residence in 1905. Official Kongōbuji chronology.

Philosophy, Aesthetics, and Phenomenology

Aristotle. Metaphysics. Translated by W. D. Ross. Oxford: Clarendon Press, 1924.

Cassirer, Ernst. The Philosophy of Symbolic Forms. 3 vols. Translated by Ralph Manheim. New Haven: Yale University Press, 1953–1957.

Deleuze, Gilles. Difference and Repetition. Translated by Paul Patton. New York: Columbia University Press, 1994. Originally published 1968.

Dewey, John. Art as Experience. New York: Minton, Balch, 1934.

Hegel, G. W. F. Phenomenology of Spirit. Translated by A. V. Miller. Oxford: Oxford University Press, 1977. Originally published 1807.

Heidegger, Martin. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell, 1962. Originally published 1927.

———. “Building Dwelling Thinking.” In Poetry, Language, Thought, translated by Albert Hofstadter. New York: Harper & Row, 1971.

James, William. Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking. New York: Longmans, Green, 1907.

Kant, Immanuel. Critique of Pure Reason. Translated and edited by Paul Guyer and Allen W. Wood. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception. Translated by Donald A. Landes. London: Routledge, 2012. Originally published 1945.

Peirce, Charles Sanders. Collected Papers of Charles Sanders Peirce. 8 vols. Edited by Charles Hartshorne, Paul Weiss, and Arthur W. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1931–1958.

Whitehead, Alfred North. Process and Reality: An Essay in Cosmology. Corrected edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press, 1978. Originally published 1929.

Philosophy of Science and Science and Technology Studies

Daston, Lorraine, and Peter Galison. Objectivity. New York: Zone Books, 2007.

Feyerabend, Paul. Against Method. London: New Left Books, 1975.

Haraway, Donna. “Situated Knowledges: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective.” Feminist Studies 14, no. 3 (1988): 575–599.

Kuhn, Thomas S. The Structure of Scientific Revolutions. Chicago: University of Chicago Press, 1962.

Latour, Bruno. Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1987.

Polanyi, Michael. Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy. Chicago: University of Chicago Press, 1958.

———. The Tacit Dimension. Garden City, NY: Doubleday, 1966.

Popper, Karl R. The Logic of Scientific Discovery. London: Hutchinson, 1959.

Prigogine, Ilya, and Isabelle Stengers. Order Out of Chaos: Man's New Dialogue with Nature. New York: Bantam Books, 1984.

Simondon, Gilbert. L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information. Grenoble: Jérôme Millon, 2005.

Uexküll, Jakob von. A Foray into the Worlds of Animals and Humans, with A Theory of Meaning. Translated by Joseph D. O'Neil. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2010. Originally published 1934.

Publicness, Place, Power, and Ethics

Arendt, Hannah. The Human Condition. Chicago: University of Chicago Press, 1958.

Foucault, Michel. Discipline and Punish: The Birth of the Prison. Translated by Alan Sheridan. New York: Pantheon Books, 1977.

Habermas, Jürgen. The Structural Transformation of the Public Sphere. Translated by Thomas Burger. Cambridge, MA: MIT Press, 1989.

Ingold, Tim. Lines: A Brief History. London: Routledge, 2007.

Lefebvre, Henri. The Production of Space. Translated by Donald Nicholson-Smith. Oxford: Blackwell, 1991.

Massey, Doreen. For Space. London: Sage, 2005.

Nancy, Jean-Luc. Being Singular Plural. Translated by Robert D. Richardson and Anne E. O'Byrne. Stanford: Stanford University Press, 2000.

Turner, Victor. The Ritual Process: Structure and Anti-Structure. Chicago: Aldine, 1969.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。

用語注

生成学

生成学は、美学者母の研究全体を示す総称である。存在、自己、文化、芸術、科学、技術、経済および社会制度を、完成した実体ではなく、関係を通して生成され続ける構造として研究する。生成の位相存在論は、生成学の存在論的基礎理論に位置づけられる。

英語表記は Generative Studies とする。

生成の位相存在論

存在を固定的な実体ではなく、自己・自己以外・環境の接触、差異化、接続、切断および再帰によって生成される位相的構造として捉える存在論である。

英語表記は Generative Topological Ontology、略称は GTO とする。

個別具体的普遍性

交換不可能な個別的存在、身体、場所、出来事または形が、その差異を失わずに自己以外との関係を開くことによって成立する普遍性である。

英語表記は singular-concrete universality とする。「singular」は交換不可能な一回性を、「concrete」は身体・場所・歴史・関係への現実接地を示す。

一般抽象的普遍性

複数の個別具体的関係から共通性、比較可能性、反復可能性、測定可能性および適用可能性を抽出することによって成立する普遍性である。

英語表記は general-abstract universality とする。

文化的普遍性

個別具体的な接触が、印・型・形・座・席・位・無名性を通して、差異を含んだまま自己と時代を越えて継承される普遍性である。文化的普遍性は個別具体的普遍性を生成的基礎とするが、その内部に一般抽象化も含む。

英語表記は cultural universality とする。

科学的普遍性

観察、測定、実験、再現、反証、形式化および公開によって、観察者と場所の差異を越えて検証可能な関係を確立する一般抽象的普遍性の精密な形式である。

英語表記は scientific universality とする。

印

自己と自己以外との接触によって現実に残された差異であり、完成した記号と意味に先立つ痕跡である。

英語表記は Mark とする。ただし文脈に応じて trace の含意を併記する。

型

個別具体的な印が、異なる身体、素材、場所および時間において差異を含みながら反復されることを可能にする関係構造である。

英語表記は Kata とし、type、pattern、mold などへ単純に還元しない。

形

型が個別具体的な素材、身体、場所および時間において、感受可能なまとまりとして現実化したものである。

英語表記は Form とする。

座

複数の個別的存在が、差異を保持しながら関係を生成する場である。固定的な共同体や組織だけを意味しない。

英語表記は Za とする。

席

座の内部で個別具体的な存在が占める、交換不可能な位置である。

英語表記は Seki とする。

位

席が他の席との関係において成立させる、差異的な位置、働き、強度、権限および責任である。

英語表記は Position とする。ただし単なる空間的位置ではなく、relational position の意味を含む。

無名性

個別具体的に生成されたものが、出自と責任を保持しながら、特定の名、意図、所有および生涯を越えて他者と後代へ継承される存在様態である。

英語表記は Namelessness とする。anonymity や impersonality とは区別する。

作品性

生成された形が作者の意図、用途、所有および現在の文脈を越え、自己以外との関係を生成し続ける存在様態である。

英語表記は Workhood とする。

自己外部化

自己が言葉、行為、作品、制度、技術および記録を通して、自己の関係を自己以外の世界へ残す働きである。ただし、外部化されたものを自己が完全に統御することはできない。

英語表記は Self-Externalization とする。

自己以前性

完成した自己の成立に先立って、身体、他者、言語、環境、歴史および物質との関係がすでに働いていることを示す。

英語表記は Self-Precedence とする。

人間以前性

人間による命名、分類、制度化および意味づけに先立って、世界と存在が生成していることを示す。

英語表記は Pre-Humanity とする。

自己以後性

自己が残した印、型、形および関係が、自己の意図、不在および死を越えて作用し続けることを示す。

英語表記は Self-Posteriority とする。

人間以後性

人間の行為、技術、制度および環境改変が、個々の人間と人類の意図を越えて作用し続けることを示す。

英語表記は Human-Posteriority とする。

即

異なるものが差異を失うことなく、互いを生成する直接的関係に入ることを示す。単純な同一性や融合ではない。

英語表記は Soku とする。

非

一方を単純に否定するのではなく、存在を自己同一性から開き、自己と自己以外の分化および接続を可能にする契機である。

英語表記は Hi とする。

色気

未特定の未来が形の内部に感受される関係力である。

英語では次のように定義する。

Iroke is the relational force through which an unspecified future can be sensed within form.

公界

歴史的には、網野善彦が論じた無縁・公界・楽に関わる具体的な社会的・制度的領域である。本論ではそれと区別しつつ、複数の領域を分けながら、いずれか一方へ排他的に所属せず、それらの接触、移動および再関係化を可能にする存在論的構造としても考察する。

英語表記は Kugai とし、Kōkai とは表記しない。

道

こちらとあちらを接続するだけでなく、道が成立することによって両側そのものを分化させる生成的境界である。美学者母の理論では道そのものを公界として捉えるが、本論全体を道＝公界という単一主張へ還元しない。

英語表記は Road または Path とし、存在論的概念として用いる場合は大文字で Road と表記する。

現実接地

概念、言語、記号、評価、モデルおよび制度が、身体、物質、場所、行為、結果および他者との接触を保持することを意味する。

英語表記は reality-grounding とする。

研究状況

本論文は、美学者母の生成学および生成の位相存在論を構成する継続的研究の一部である。本稿 Version 0.4 は、「二つの普遍性」を二つの独立した普遍性ではなく、同じ普遍性の二つの生成様態として再定義した。

また、個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の関係を、対称的な循環ではなく、個別具体的普遍性が一般抽象的普遍性を生成的・歴史的・実践的に基礎づける非対称的循環として改訂した。

さらに、科学的普遍性を文化と並列する独立した根とはせず、文化的普遍性から成立した一般抽象的普遍性の精密な形式として位置づけた。ただし、この生成的基礎づけは、科学的妥当性を文化的信念へ還元するものではない。

今後の課題は、個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の区別を、科学史、宗教史、美術史、技術史、公共性論および人工知能研究の具体的事例によってさらに検証することである。また、公界の歴史学的概念と道の存在論的公界性との関係についても、両者を混同せず、接続可能性と差異をより精密に検討する必要がある。